

り毎年の艦齡超過による除籍艦の補充と、前記三計畫の目標とする七百一隻、三百五十
四萬七千噸に達するためには、爾後五年間に約四百隻、二百三十萬噸の新規建造を必要
とされたのである。

次に米海軍の航空兵力擴充目標であるが、これ亦建艦計畫と同様、一九四六、七年を
目標として、現在の海軍飛行機二千數百機を一萬五千機以上に、飛行艦四十八隻を整備
完成せんとして來たのである。

元來米海軍飛行機數は歐洲戰爭の勃發當時約二千機であつたものを一割一分海軍擴張
案によつて飛行機三千乃至四千五百、飛行船十八隻迄に増加目標を定めたが、ドイツ空
軍の活躍振りに刺戟され、一昨年六月議會を通過した海軍航空擴張法により飛行機一萬
機以下、飛行船四十八隻以下と改め且つ海軍航空士並に現役飛行士の訓練施設一萬六千
名分を整備する權能を大統領に賦與された。續いて海軍は兩洋同時作戰の必要を名目と
する七割擴張案に基き、飛行機一萬五千機とし且つこれを増加することが出来ることと改め

た。即ち米海軍航空勢力は一九四〇年から一九四七年迄の間に飛行機一萬三千機を増加
せしめんと企てたのである。而して米國が爾來最も力瘤を入れて來たのは空軍建設であ
つた。米空軍は日本と同様陸海兩軍に分かれてゐるが、昨年度に於けるその現勢力は陸
海軍機を合せて第一線機八千五百乃至九千機で今年中の建設目標を三萬五千機としてゐ
る。これは二萬五千機を陸軍へ、一萬機を海軍へといふ計畫である。そして昨年一月頃
には一ヶ月の生産能率は千四百機から千五百機であつたが、漸次向上して九月頃には二
千機の高能率を示すに至つた。

何れにしても此の尨大なる海軍計畫は一九四七年までに完成の豫定となつてゐるが、
これが乗員は如何に補充されるか、士官の養成については海軍兵學校の採用人員を増加
の一千乃至一千二百名となし同時に豫備士官、豫備下士官を召集したり、また海軍兵員
を二倍以上の廿二萬五千人に増勢するなどスターク案と睨み合せて人的用員の充足に努
めて來たが、この充員問題に關し果して短期間に充分なる精兵を得るや否や米海軍の重

大な悩みである。更にまた反樞軸國家への兵器廠を以て任ずる米國は、結局計畫通りに其の工程を進捗し得るや頗る疑はしきものがあるのである。

戦前の米國は援英に忙殺されながらもその艦隊の大部分を太平洋に集結して大西洋は哨戒艦艇に止めてゐた其の眞意も太平洋を想定戰場としてゐたからである。當時太平洋に集結中の太平洋艦隊は主力艦十二隻、甲級巡洋艦十一隻、乙級巡洋艦十四隻、航空母艦三隻、驅逐艦九十隻、潜水艦三十數隻と見られ、その中の一部は獨ソ戦開始後大西洋に移されたやうであるが、その大部分は米國兩岸とハワイに集結されてゐた。此の外マニラを基地とするアジア艦隊は巡洋艦二隻、驅逐艦十五隻、潜水艦二十隻、内外が主力となり水上機母艦、飛行艇母艦數隻其他が附屬して計四十五隻内外のものがあり、その空軍も二百機程度を持つてゐた。しかも是等の海軍兵力は北はアリユーション群島、中央ハワイ、南は英米蘭濠の「對日包圍線」を以て、虎視眈々我が國に重壓を加へんとしたのである。

しかるに一度び戦端が開かれるや我が海軍の前には、もろくも潰え去り、ハワイ急襲の痛手によつて一舉戦艦五隻を失つて以來今日までに戦艦撃沈六、損傷五、航空母艦撃沈七、撃破二、巡洋艦撃沈一二、大中破一二、潜水艦撃破四〇隻餘といふ惨敗振りを示し今や戦前の保有勢力から見た残存現勢力は戦艦七、航空母艦二、巡洋艦一三、潜水艦六〇乃至六五といふ悲惨な姿となり、只管建造能力を恃みに急造、改造により海軍力の再建に大童となつてゐる有様である。

七、アメリカの建艦能力

米國海軍擴張計畫の實現のため、米政府は果して如何なる手段を以てその充實を圖らんとして來たか、先づ自國の豊富な資源並に高度の工業力を總動員すると同時に民間十ヶ所の造船所、八ヶ所の海軍兵器工廠の設備擴張を促進すると共に三部制晝夜兼行で能率を擧げて來た。而して左記の方法を以て海軍充實に對し官民一致眞劍なる努力を拂

つて來たのである。

一、國防諮問委員會の活躍　これは大統領の軍備充實計畫に對する最高諮問機關であつて、民間から一流の有能の士を簡拔して各自の専門方面を擔當せしめ軍備充實に對して重要な役目と目覺しい活躍を行はしめた。

二、工場施設の擴充　七割海軍增強案通過に至り英國向け軍需品製造と相俟つて現有工場施設のみを以てしては到底海軍擴張計畫を實施することか不可能であることが判つたので、政府は造船設備擴張費一億五千萬ドル、大砲製造能力増加費五千萬ドル、装甲鋳造能力増加費二千萬ドルを以て民間既存の工場設備擴張、増設及び新設を開始した。然も政府は海軍に關しては船渠、棧橋等の擴張、新設、休止造船所の再開に關し、一昨年十月から合計約一億ドルの費用を會社に支出する旨を發表した。同時に政府は装甲鋳造大砲等の造艦に關係ある民間製鋼會社の設備擴張に對しても七千萬ドルを支出すべき旨を發表した。

三、軍需資材の確保　國防計畫實施上、軍需資材が海外に流出しない様に政府は一方に於て諸種の軍用資材の輸出許可又は輸出禁止を行ふと共に、米國內に於て生産量の少きゴム、マンガン、タンゲステン等の獲得、貯藏、並に航空用ガソリンの買付、貯藏に大童となつた。即ち當時既に輸出許可制をとつたものは武器、彈藥、工作機械、特殊原料、屑鐵、鐵、合金材料などで、輸出禁止を行つたものは飛行機用ガソリンその他であつた。

四、軍需工場の強制徴收　軍需工場確保の意味に於て新たに法律を制定し、政府の軍需注文を理由なくして民間が拒絶した場合は工場主に對し三年以下の禁錮及び五萬ドル以下の罰金を課し、更に政府は適當なる賃借料を支拂つてその工場を強制徴收することになつてゐる。

五、技術者並に従業員の増加　海軍兵員の問題と共に政府が國防計畫實施に當つて最も不安を感じて來たのは技術者並に従業員の質と量の問題であつた。この意味から議

會は一昨年六月産業勞働者の訓練費として一千五百萬ドルの支出を議決した、この費用は各州に分配されたが、新國防計畫實施に要する従業員數の増加は陸海軍併せて百五十萬人を超えると云はれてゐる。

六、國防工事促進法の成立　一昨年六月二十八日この法律を議會が可決したが、海軍々備充實に關係ある點は左の通りである。

(一) 海軍の注文は外國輸出品に對して優先權を持つ。

(二) 從來の艦船建造契約は入札であつたため甚だしく遅延する恐れがあつたのを改めて爾後は隨意契約とし、建艦着手の時期を早めた。

(三) 海軍従業員の作業時間の一週四十時間を四十八時間に改めた。

(四) 退職従業員の復職制を作つた。

七、國防生産管理局の成立　米政府は尨大なる國防計畫と對英武器援助を實現するため從來澁滞してゐた軍需生産を軌道に乗せる目的で國防生産管理局を設置し、且又之

を遂行すると共に各省事務の有効なる連絡をとらしむることゝなし、國防計畫のために必要原料の充分な供給と生産施設の整備を保障するに必要なあらゆる適法的措置を立案し之を遂行するに必要なあらゆる決定を行はしめ、更に國防計畫と無關係に經營されてる私設工場を徵用し、又各生産施設につきその最大限度の活用を保障するため、に夫々施設の必要量を決定する。更に國防資材の引渡に對して與へられた優先權の時期程度及びその方法を決定する權根を與へた。

以上の諸施設により米海軍の大擴張が果して確實な効果を擧げて來たか否かは漸く措き、戦前に於ける米國は海軍の新計畫が自國の國防上絶対必要なものとして從來兎角遅れ勝ちの國防計畫に最大の馬力をかけ、急速これが實現に眞劍な努力を傾注して來たのである。そして昨年四月十六日コーンドルフ聯邦造船會社々長はコロンビヤ大學に於て造船事業の進捗状況につき演説して左の如く述べてゐる。

「米國の造船界は百億弗の國防計畫に基き海軍艦艇九百隻、商船九百隻の建造に着手し

てゐる。かゝる尨大な造船計畫は米國史上最大のもので、之に要する勞働延人員は百萬人以上にのぼる。船舶建造速度も促進される見込で、或る種型艦船の建造は平均二年乃至三年々限を縮少し得ると考へてゐる。若し現在の建造計畫が愈々軌道に乗れば米國は總計四十二の造船所、三百五十の造船臺を有することになり目下建造中の合計五百萬トン、九百隻の商船は一九四三年迄に就役せしめることが出来る筈で、計二百五十萬トンの海軍艦艇は一九四六年には竣工するであらう」

又海軍だけの艦艇建造状況につき昨年六月二十五日ノックス海軍長官は同年一月以降の米海軍の建艦計畫の進捗を次の如くに發表した。

「米海軍は七十二億三千四百萬弗の豫算を以て二千八百三十一隻の艦艇の建造に着手したが其の中戦闘艦三百三十七隻（總トン數百二十七萬四千トン）補助艦艇百五十四隻、水雷敷設艇百五隻、哨戒艇百四十四隻、防塞艇三十五隻、合計七百七十五隻は既に完成を見た。尙ほ六月一日現在の造船所従業員數は二十萬三千四十六名で五月一日現在數よ

り六千二百二十五名の増加となつてゐる」と

右の諸點から考へると米海軍の擴張計畫は豫想以上に實現性を持つて進められて來た事は十分留意して置く必要がある。従つて今後も米國はその豊富なる資源と高度の工業能力を以てその完成に向つて邁進し、敗戦海軍の建直しに傾倒することは先づ明瞭とするも、今日迄の経過殊に序戦の敗惨によつてそれには相當の悲觀材料もあつて一九四七年迄にその完成を見ることは相當困難ではないかと思はれる。

これを判斷するには少くとも造艦設備、造艦技術、資材、國內事情を考慮する必要がある。第一の造艦設備であるが、今迄には大戦艦を造る船臺は、費府工廠に三、紐育工廠に二、ノーフォーク工廠に二、メーア島工廠に二、民間の紐育造船所に二、ニューボートニユース社に三、フォア・リヴァ社に二、合計十六の戦艦が同時に建造され得る設備を持つてゐた。その戦艦が二年で進水すれば空いた船臺で直ぐに新艦が起工できるから、三年單位とする最大建艦量は三十二隻となる。先づ以て主力艦の建造だけはこれ

でも間に合ふ譯である。

だがこゝに問題となるのは米國の新規建造艦艇中特に注目を要するのは超大型戦艦の建造である。開戦直前に工事中の新戦艦は三萬五千トン級六隻及び四萬五千トン級四隻、合計十隻であつた。次いで注文を發せられた戦艦七隻の中には五萬五千トン乃至六萬トン級の戦艦が含まれてゐることが明瞭となつたから、戦艦のトン數が増して來ると、在來の船臺では間に合はぬこととなり、これが擴大にも相當の日子を費やすであらうし其の他の設備にも多大の手數をかけねばならぬから、そう思ふ通りに建艦が促進されるものとは考へられない。又主要艦種の擴張に對應して諸種の補助艦船を急速に整備する必要があり、是等は何れも水上機母艦、運送船、糧食船、給油船、病院船、潜水母艦等に充當されるものであつて、米海軍中これ等補給船隊の不足は渡洋作戰を目標とする米軍の最大弱點と見られてゐるから、これが補充に關して頗る焦慮してゐるのである。

元來米國の商船隊はその量に於て劣り其の質に於て舊式に屬するものが多かつたが國防上の見地から議會は一九三八年の商船法を通過せしめ本法に基いて政府の機關として海軍委員會を設置し積極的に商船の改造充實に乗出したのである。そして同委員會は毎年五十隻、十年間に五百隻の商船新造計畫を決定し一九三八年一月より實施に着手したが、この第一次計畫たる十年間五百隻が一九四七年末迄に完成せしめんとし、一九三八年より一九四〇年十一月迄の期間に於て建造に着手せる隻數は一七九隻に達し、其の大半は既に竣工したのであるが、この大量の造船は假令、コントロール氏の陳述があつたにせよ建艦工程に相當の影響を及ぼすものと思はれる。

殊に軍艦商船の大擴張が一時に盛り上つたのであるから、之に伴ふ設備の擴張は勿論之に従事する技術者職工の不足は何と言つても最大なる痛手であらう。元來米國はその商船界の不振と同様、造船界に於ても優秀な技術者が比較的少なかつたのである。従つて今次の大擴張には先づ是等技術者の多量養成から始めて行かなければならないので、期限付きの大擴張には相當手違ひを生ずるを免かれないと思はれる。殊に今次の大擴張

には一方武器貸與法による援英強化といふハンデキャップもあるばかりでなく、敗戦の影響を受けてゐるから、これ又建艦工程に相當の遅延を齎すのでないかと思はれる。これを前世界大戦當時の海軍擴張に顧みると、一九一七年から始めたダニエルズ大擴張案——主力艦十六隻を三年間に造る計畫——が一九二一年になつても僅かにコンスチチューション（巡洋戰艦）級二隻が二五%しか進工してゐなかつたのは事實であつた。その遅延には材料問題の外、技術、豫算、工費の昂騰、増税其の他の社會問題をも加味されたのであるが、事實は該擴張案が紙上計畫となつて其の不手際を華府會議で取返へしたといふことになつたのである。

併し、今日と一九一七年とは米國の工業力も國富も多大の相違があるのであるから、假令、其の國際關係は略ぼ同一の状態に置かれてゐても其の擴張程度に於て多大の相違があつても、一應は濟しこなしてゆくものと考へるのが妥當であらう。

又建艦に必要な資材に就ては一ヶ年八千萬トンの鐵を生産する國であるから基本資

に對しては不足はない筈であるが、マンガン、タングステン、モリブデン等の非鐵金屬に就ては相當の惱みを持つてゐるばかりでなく、巨砲砲身その他主要装甲板等、平常需要のないものに對する設備は技術は、到底ストック擴張案急速の要求に應じ得ない惱みがある。船體の艤装は出來ても大砲が出來上らないと在ては軍艦と稱することは出來ない。此の點は一九一七年にも苦き經驗を持つてゐるのである。果して今次の擴張に造船と歩調を合せ得るや否や疑なきを得ない。殊に反樞軸國の兵器廠を請負つてゐる米國は、其の軍需生産の半分を貸與すると意氣込んでゐるのであるから、こゝに急場の需用に追ひ使はれて自然に建艦の方に手が抜け勝ちとなるのではないかとも考へられる。所詮は人と熱と力とが萬事を解決するのであつて、この點に於てはルーズヴェルト大統領はスチムソン、ノックスの陸海兩相を左右にかゝへて、人と熱とに於ては事缺かぬことであり建艦能力に多少の不備不足があつても先づこれが完遂に邁進するものと思つて居れば間違ひはないのである。

かゝる情況下にある米國海軍は敗戦を挽回すべく必勝の作戦を練つてゐることであらう。現にパナマ運河は目下擴張工事を進行中の模様で是亦一九四六年度には完成する豫定で、而かも艦隊の運河通過は二十四時間で行はれ得る。大西洋艦隊も事實上太平洋艦隊と成り、米海軍は全力を擧げて太平洋の廣域に今後反撃態勢を整へることと思はれる。我々は米國のこの反撃作戦に對し緒戦の大捷に酔ひしれることなく米海軍撃滅に邁進する覺悟であらねばならぬ。

八、英米聯合艦隊の戦力

英海軍はかつては七つの海を制すと誇り、世界一を以て任じて來たものである。而かも歐洲戦が開始されてから果してどれだけの軍艦が新造されたか。それはさておき、英國は獨伊との開戦以來ロイヤルオークが獨潜水艦の血祭りに上げられて以來、フッド其他マレー沖海戦までに戦艦の撃沈五、損傷五で戦前の十八隻は既に残存八となり航空

母艦十一の内五を失ひ、巡洋艦七八の内三〇を失つて四八を残す非勢となつてゐる。一方米國も前述の如く戦前勢力の内残るは戦艦七、航空母艦二、巡洋艦一三となつた。そこで今後は新造艦の補充に努める一方英米聯合艦隊の作戦が豫想される。これは既に今次大東亞戦争に於てソロモン海戦等に濠洲海軍等をも寄せ合めた聯合艦隊を形造つてゐるが、扱て其の戦力は如何なる程度のものであらうか。英國は一昨年米國への大西洋岸英領海空軍基地の租借並に米國の艦齡超過驅逐艦五十隻の讓渡に關する協定成立に先立ち、英國政府は「英海軍は如何なることがあつても降伏したり或な自爆したりするやうなことは斷じてない。萬一の場合は英海軍は英本土水域を去つて、英帝國の他の部分の防衛に當る」べきことを米政府に對して誓約したことがある。この事は勿論米國政府の要請に基くものであつて、米國は大英艦隊が獨空軍並に潜水艦その他に依つて相當の痛手を蒙つたとはいへ、依然として大英艦隊の健在に信賴して其の利用價値を認めてゐたことを示すもので、英本土が獨兵の蹂躪に委せられた場合、米國政府は英艦隊を收容し

これと協同して、寧ろ之を率ゐて東西兩洋の作戰に利用せんと企圖してゐたのである。

これには一昨年の大統領選舉戰に於てウイルキ―が述べた演說中「我々は最早英國が敗北を喫することをあり得ることとして豫想しなければならぬが、英艦隊が敗れた場合にそれは米國の國防力を著しく弱めることを認めなければならぬ。即ち今日まで大西洋を支配してゐた英艦隊が存在してゐたればこそ、我々は自由にその力を太平洋に集中することが出来たのである。もし英艦隊が全部海中の藻屑となるか或は獨軍に鹵獲せられるならば、歐洲の大部分をその掌中に收めたドイツが、大西洋を支配することゝならう」と述べてゐるが、それは能く米人の心理を代辯したものであつて米人の多くは日獨伊三國同盟條約の締結によつて將來兩洋作戰に適する艦隊を保持する必要を痛感し、差し當り英艦隊との聯合によつて急場の間に合せんと希望してゐたことは想像に難くなかつた處である。

それはそれとして序戰に敗北を喫した英米海軍が英米聯合艦隊を編成して挽回に努む

るとしても、第一の問題はその統御と用兵とに繋つて來る。勿論統御と用兵とは實際別箇に相離れて存在する譯ではなく、一括して統帥と呼ばれてゐるのであるが、其の内容に於て統御が軍隊運用の内面觀とすれば、用兵は其の外面的觀察となり、一が體であるならば他は其の用に外ならないのである。そして能く統御せられた軍隊は愛國の至情に燃え、軍紀嚴肅にして而も上下相親み、全軍一心同體、主將の意の如くに動くものであるが、この本立たざれば、軍隊は要するに一個の烏合の衆と化し、戰略も戰術も施すに由なからんとするのである。故東郷元帥は嘗て日清、日露兩戰役共に既に早く相手艦隊の軍紀嚴肅ならざるを觀て其の恐るゝに足らざるを判定せられてゐるが、是れ所謂體を觀て用をトされたる次第で、實に聖將の眼大炬の如きものがあつた譯である。

従つてよし英米聯合艦隊が編成されたところで、英米兩艦隊相互の間には相當の扞格を生じ、指揮統帥の上に決して旨く行くものではない。殊に前大戰に於ける米軍の我儘さには聯合軍も相當手古摺つたのであるから、今次の場合は一層傍若無人に振舞ふこと

は想像に難くないのであつて、英米協同作戰に一大障碍を生ずるものと思はれる。

それでなくとも聯合軍の弱點は指揮統一の不備であつて、假令、其の兵力は遙かに敵を凌ぐものがあつても、常に失敗の歴史を綴つてゐるのは畢竟士氣の一致を缺き、用兵作戰の迅速果敢を案すからである。殊に陸戰と異り、海上作戰に於ては一會戰の失敗も全戰局中取返へしの付かぬ破目となるからである。而かも統御と用兵とは、戦力維持の根幹であつて、その良不良は遙かに物的の優劣を凌駕することは史實の明證する所である。之に對して三國同盟側はどうかと云ふと、先づ地域的に各分擔を異にし、海上兵力に於て特殊の艦種を有してゐるのであるから、其の協同動作に於ても大綱の協定によつて各獨立的に行動することとなり、何等直接の統帥事項に干涉する必要を生じないのである。別けても我が海軍に在つては一手に太平洋を引受け、自由に己れの欲する所に行動し得るのみならず、その統帥は一に、天皇に歸一し奉り、一國の興廢を賭して戦はれるのであるから、其の強みは絶對となるのである。而かも三國同盟は兩大洋に在つて

東西相呼應して英米聯合艦隊を牽制するのであるから、一層その強味を増すのである。

この一番大事の點に於て、英米聯合艦隊怖るゝに足らずとなるのである。

然らば英米側に於ても大西洋を英艦に任せ、太平洋を米艦隊に一任することゝなれば、統帥の點に於ては兩者相等しくなるのであるが、英國領土の分散體系から到底それでは濟まされない。また英本土の存在する限りは大東亞戰爭開始以前でさへ艦船の不足を告げてゐるのであるから、更に米艦隊の援助要請の切なるものがある。旁々受持地域を決めて別々に行動することは緒戰に蒙つた米海軍の打撃から見ても殆んど不可能であつて太平、大西兩洋共殘存の英米聯合態勢を餘儀なくされ、前記の弱體を隨所に暴露するに至るであらう。

ところで茲に英米聯合によつて用兵上重要な戰略基地の共同使用といふ一大利便を得ることである。この共同防衛の態勢は遠く大西、太平兩洋を渡つて敵地に近く戰する米國にとつては何よりも必要な事項であるのである。

艦隊と根據地の關係は今更ら絮説する必要もない程重大である。それが大艦隊であればある程、作戰地域が遠隔であればある程絶對に必要である。此の點に於て米國艦隊は從來多大の支障を感じてゐたのである。それが英米合作に依つて特に西太平洋に於て英領土を使用することゝなれば、彼れの年來の志望の一半は、達成される可能性が多かつたのであるから、その用兵の便宜は著るしく戦力を増進することゝ思はれてゐたのである。

然るに我が神速息つく間も與へぬ猛攻により頼む英米海軍根據地はシンガポールを始め、香港、マニラ、ガム其他殆んど潰え去り其の希望の大半は失はれたのである。

次には聯合艦隊の兵力量であるが、米英ともに既に前述の如き非常な損害を蒙つてゐる。従つて今後は米海軍の擴張計畫を目あてに戦争の長期化とそれに伴ふゲリラ戦術に特む處とする外に作はないであらう。果して米海軍の擴張計畫の實現によりどれだけの戦力を建直し得るか之亦疑問である。一方歐洲戦側に見るに、英本土の物資輸送に對す

る獨潜水艦、飛行機の逆封鎖には相當多數の護衛艦を要し、地中海作戰も其の一半を殺いでゐるのであるから、假令、英米聯合艦隊を編成したところで、眞箇の戦闘第一線に充當し得るものは差程の勢力となり得ないと思はれる。況んや今後地中海に於て、本土近海に於て、獨伊の海上攻勢が活潑となれば、其の損害は一層甚だしくなるものと思はれ英米聯合艦作戰の企圖も謙存外喜びとなるのではないかとも考へられるのである。

何れの觀點から觀ても聯合艦隊それ自體の基本的弱點は、到底艦船ばかりの増勢では之を償ひ得ないのは史上の證明する所である。世界第一を誇り合つた驕見の寄合では、恐らく一致の作戰行動は六ヶ敷いであらう。

要するに傷ついた英米聯合艦隊は其の巨大の國體を描へても、畢竟一世紀半前の西佛聯合艦隊の轍を踏むのでなからうか。樞軸側には幾人かのネルソン以上の將帥が控へて居るに於ておやである。

九、海戦と海運

海戦と海運とは切つても切れぬ關係にある。海戦が制海權の爭奪を根本義として行はれるのは言ふまでもないが、それが一大決戦を経なければ制海權の歸趨は定まるものではない。トラファルガーの海戦なり、日本海海戦なり、ジュットランド海戦なり、今次のハワイ、マレー沖やソロモン海戦なりの大戦果を擧げた後でないといふほどの制海權は掌握されるものではない。そこで優勢な海軍國は開戦後成る可く速かに劣勢海軍國に決戦を挑まんとするものであるが、劣勢海軍國はまた成る可くこれを避け奇襲作戰によつて敵勢力の漸減を圖り、其の勢力の均衡を得て始めて決戦に臨まんとするものである。また他の方法としては移動作戰によつて敵の有力艦隊をその方面に分離せしめ、其の虛に乗じて殘留艦隊に決戦を強ひそこに局地の優勢を占めて個々撃破の擧に出でんとすることもある。

しかし、この決戦は全戦局を通じて一回か二回が關の山で、一回の決戦に敗けた海軍は大體全戦局間挽回すべからざる悲境に立たせられるのが通例である。従つて容易にこの決戦は優勢國の思ふ通りに行はれないのである。然らば其の間に於ける海軍力は如何なる方面に最も重點を置いて活動するかといふと、それは敵國の通商破壊を目標とする海運の撃滅に向けられるのである。殊に近代國家の存立上貿易は其の重要部分を占めるのであるから、海軍戰略の重點が自國の貿易を擁護し、敵國の通商路を遮斷するための戦ひに置かれるようになるのはまた已むを得ないのである。しかも、海戦の全體を涵て此の期間が最も多く、敵國の海上貿易を全滅せしむることによつて、その經濟力を涸渴せしめることが、英蘭戰爭以來、常に海上權を握つた國の最大の武器であつたのである。特に大西洋の海上作戰において、軍事要素より經濟要素を重んずる傾向が益々甚しくなつたのは、敵國の領土に對する攻撃によつて勝利を收める機會が減少したごとく、今一つは主要國家が海運による物資の供給に依る存す程度が増大したからである。かく

して近代海戦はこの海上貿易の攻撃、防禦に多大の勢力を集注されるのである。

之に反して太平洋方面では比較的海運の數量も尠く、その重要さも一般にさう死命を制するといふ程ではなかつた。従つて海運を杜絶したゞけでは海上權力國の決定的武器となすに足らなかつた。日清、日露の戦争の場合に於ては軍事目的が經濟的要素よりも遙かに重大であつた。しかし今は日本にとつては大に其の趣きを異にし、軍需資材の供給においても、食料の確保においても軍隊の輸送においても海運の杜絶は日本の生存にとつて絶對のものとなつて來たのである。殊に英米を相手とする今次の戦争において、假令、外洋貿易は大半杜絶したとはいへ、大東亞共榮圏内の海運は多く益々重要性を増して來たのであるから、もし、この海運に敵の脅威を受けることゝなれば、今後の作戦上多大の蹉跌を生ずるのみならず、經濟生活上にも尠からざる苦痛を蒙ることゝなるのである。従つてわが國としては最少限度において絶對に大東亞水域の制海權を掌握して、わが海運の保護に當らねばならないのである。更に今次の戦争に於ては廣汎なる太平洋

上の各地に大作戦を展開されるのであるから、軍隊の輸送補給、兵站線の維持等悉く海運によらなければならぬのであるから、この海運こそ作戦展開の大動脈と言つていいのである。

マハンは曾て海上兵力とは軍艦、根據地、商船隊の綜合力なりと言つた。米國が海軍の擴張と共に商船隊の增強に努めんとし、英國が飽迄世界一の海運國を以て任じこの潜在威力の維持に努め來つたのも、實にこの海上綜合力の優越を期せんとして來たからである。わが國もこの點に關しては小なりと雖も決して人後に落つるものではなかつた。

世界第三海運國として而かも數年來優秀船建造に懸命の努力を費やして來た結果は、支那事變以來五ヶ年を経て今次の如き大作戦を展開し、水も洩らさぬ周到の計畫の下に大膽不敵な上陸作戦を敢行し得たことは、用兵作戦の至妙を發揮したことは勿論であるが、數千キロを隔てた各地に充分な兵力を輸送し、何等の損害を蒙ることなく秩序整然

と豫定の行動を執つて謬りなかつたことはわが商船隊の優秀さを證明するものである。

勿論、これ等御用船の乗組員は海軍豫備員として今戦時任務に服してゐるのであるから其の心構へは毫も海軍々人に異なる所なく一死報國の念に燃え立つて、その一舉一動を律してゐる點は、他國人の到底企及すべからざる所で、わが海運界の最も誇りとするところである。既に日清、日露の兩戦役を経、また世界大戰の試練を味あひ、その都度彈丸の下、機雷、潜水艦出沒の中にあつて海軍將兵と同様の危険を冒し、天晴れ重大任務を遂行して、その名聲を天下に揚げたのであつたが、今次の大作戦においてはその規模の大なれば大なるほど、一層御用船の要求を増大すると同時に、その活動區域も擴大し、これに伴ふ危険も倍加するものと考へなければならぬ。これが爲めには御用船の潤澤な提供と、その乗組員の充實については何を措いても海國日本の名譽にかけても仕了ふせねばならぬ。

また一方長期戦に對する生産擴充資源の輸送、食料燃料の確保等にも今後一層の輸送

力を必要とするのであるから、わが海運界に對する要求の一段と昂まることは必至である、幸に五年間の支那事變に於て直接戦争よりの被害はなく寧ろ事變中の造船繼續によつてその後噸數は逐次増加してゐるのである。また歐米航路の休止により若干船腹の餘裕を生じ、之を他に轉用するの便宜をも得たのである。然るに今次の開戦によつて英米船舶の東亞よりの總退却によつて、支那、南洋方面の輸送は日本一手でこれを引受けなければならぬこととなり、著しく船腹の不足を告げてゐる現状である。またこれと同時に米英の海上ゲリラ戦の展開をも一應は豫想し置く必要があり、これ等が支那海、南洋海域の通商破壊乃至連絡路遮斷を企てるものとせば、多少の損害も顧慮しおかなければならぬ。尤もわがローラー作戦はフィリッピン、シンガポールの攻略後も逐次南方の敵性國家に推し進められて行つてゐるから、その大ローラーの下敷となつて平定され、如何に米英が奇襲作戦を以てこれに臨まんとしても根據地なき數千キロの海上では殆んど施すに策はあるまいと思はれるが、またこれと同時にわが戦線の擴大に伴ひ益々徴備船

の數を増すこととなり、その危険率も増大するのである。

殊に今次の戦争は米英空軍の再建を豫想し、自然に長期に移行するものとして、一面交戦、一面建設を併進し成る可く速かに太平洋の制空制海權を掌握し、併せて大東亞共榮圈の確固たる基礎を築かねばならぬ。またこれと同時に印度洋を管制して歐亞の連絡を遂げ、樞軸側の具體的協同作戰を展開して米英を最後の段階に押し進めなければならぬ。また一方印度並に歐洲航路の再開によつて、こゝにも大船腹の需要が生ずるのである。

かく考へて來ると大東亞戦争の遂行も、大東亞共榮圈建設の地均しも、歐亞連絡による樞軸側との堅き握手も一つにわが海運界の活躍に待たなければならぬ。而かもこれ等は戦後の經營に懸るものでなく、今日より直に着手されねばならぬものであつて、わが船舶は東亞は勿論太平洋印度兩洋をその日章旗を以て塗り潰さねばならぬ。既に海員の優秀さと船質の良好さに就ては天下の定評を得てゐるのであるから、今後一層人と船との増強を圖り配船運営宜敷を得ば、わが海運界の大飛躍は正に瞠目に値するものあるを疑はない。

英國は戦前二千餘萬噸を以て海運界に覇を唱へてゐたのであるが、歐洲戦開始以來既に數百萬噸を海底の藻屑となし、其他他國の徴用船舶も數百萬噸を喪つて今や各國は船腹不足に深刻の悩みを持つてゐるのである。此の際わが海運界が些したる損害を受けず寧ろ船腹が逐次擴充されつゝある狀況は、正しく將來の雄飛を豫約するものであつて、太平洋上に於ける英米兩國の敗北が樞軸の完勝を豫約してゐるのと相俟つて、わが國の隆運は旭日昇天の勢ひを示してゐるのである。

十、日本の戰略

元來、國軍作戰の目的は速に敵の戦争意志を破摧して媾和を請ふの餘儀なきに至らしむるに在つて、海軍戰略の目的は陸軍戰略と相俟つて此の屈敵の目的を達成するに外な

らないのである。

二二三

然るに海國たる我が國が戦争に方り屈敵の目的を達成せんと欲せば、左の有効なる手段を採らなければならぬ。

- 一、敵海軍の撃滅、若くは其の無力化
- 二、敵領土の攻撃占領
- 三、敵の戦争資源及國民生活必需品の供給遮断

右の中敵海軍力の撃滅は總べての他の手段の根柢的前提をなすものであるから、海軍戦略の任務達成上の第一目標は速に敵の海軍力を撃滅して制海權を獲得することである。また之と同時に制海權の獲得なければ完全な制海權を確保し得ないのであるから。これ亦制海權の獲得に先んじて之を行はなければならぬ。

こゝに我が國の對英米作戦は、われに脅威を與へる米太平洋艦隊と西太平洋に於ける英米空軍を撃滅して、皇軍の豫想作戦地域の制空制海權を掌握するを最先條件としなけ

ればならぬ。恰もよし敵の太平洋艦隊はハワイに集結してゐたのであるから、緒戦の一撃に成功すれば之を一網打盡に撃滅するか或は之を無能化することも出来るのである。

たゞ同島が敵の唯一の前進根據地として防備嚴重を極め、また哨戒警戒の網を張つて皇軍の來襲に備へてゐたのと日本々土よりの距離が米本土の距離よりも一千三百哩遠いこととは、之に攻撃を加ふる日本海軍としては、多大の冒險性を持つものであつた。しかし、この千載一遇の機會を逸することは桶狭間に信長を躊躇せしむることであつて、我が海軍があらゆる危険に備へて敢然として之に最初の猛爆を加へたことは實に日本的戰略の眞髓を發揮したものである。

またこれと時を同ふして東亞に於てはフィリッピン並にシンガポールの大空襲を敢行して、その空軍を殆んど潰滅に歸せしめたことは、其の儘、西太平洋を完全に我が制壓下に置いたこととなつたのである、更にイギリスのシンガポール増援隊として將來有力な東洋艦隊の基幹となるべきプリンス・オブ・ウェルズ並にレパルスの兩主力艦を撃沈

して、イギリスの爾後の増援企圖を不可能ならしめたことは、第一項の有効なる屈敵目的を達成したものと謂はなければならぬ。

さて一國の海軍が敵の海軍力を撃滅して制海權を獲得したとすれば、其の結果はどうかなるのであるか。勿論戦争は敵の戰意を破摧しさへすればよいのであるから、情況によつてはその海軍力の撃滅によつて屈敵の目的を達成することも出来るが、今次の場合に於てはアメリカは尙ほ一半の海軍力を大西洋に持ち、造船臺には多數の新艦建造を行つてゐる且頽勢挽回にはあらゆる手段を講じて捲土重來の意氣込みを示してゐるのであるから、容易に戦争意志を挫けるものではない。是に於て日本の戰略は第二、第三項の敵領土の攻撃占領に移り、且つ逐次敵の必需資源及び生活必需品の供給杜絶に鋒を向けつゝあるのである。かくて香港、フィリッピン、シンガポールの攻略となり是等敵の據點を一掃し、更にその聯合勢力たる蘭印を攻略してそこに鐵桶不敗の堅陣を構成すると同時に、アメリカの軍需資材の必需品の供給を斷ち、且つこれと共に今や印度洋の制壓に

其の全力を向け、こゝにもイギリスの重要資源の途を斷ち切りつゝ、英米兩國をして多大の困厄に陥れるに至つた。

若し夫れ更に濠洲、ニュージールランドの歸趨を考へるならば、既に英本土からの救援の望みも絶え、英本國も何等手出しが出来ぬ羽目に陥つてゐるのであるから、彼等が自己保存を念願するならば、勢ひ英帝國を離脱して東亞共榮圈の建設に協力するのが一番賢明の策となつて來るのである。こゝに濠洲の英本國離脱によつて英帝國の崩壊は始まり、印度、南阿聯邦の離反は相踵いで起りそこに完全なる英帝國の没落を來たし、英米聯合勢力はその一半を喪ふこととなるのである。かくて英米陣營は極度の悲運に見舞はれ、アメリカが其の艦隊の再建を見るまでには太平洋上の據點は皇軍の一掃する處となつて、將來廣漠たる太平洋上の作戰に一ヶの足場も持たざることとなり、大艦隊の行動は殆んど不可能となるのである。こゝに皇軍は英米の據點を逆用して米本土に攻勢作戰を展開し、米國民をして實物教育を與へ、戰禍の激甚に驚嘆せしめて戰意を喪失せし

むることも出来るのである。かくてアメリカの尨大な軍擴も用ゆるに所なく、戦勝の希望なき戦争の繼續は到底彼等の堪ゆるところとならず、遂には屈伏の止むなきに至るであらう。此時、樞軸側は東亞共榮圈の建設と、歐阿廣域經濟圈の確保によつて如何なる長期戦にも堪え、勝利の榮光に浴して益々戦意を昂めつゝあるのである。こゝに戦争は皇軍の日本の戰略の敢行によつて、この大勢を決したと言つてもいいのである。

第八章 英帝國の崩壊

一、回教民族の反英抗争

ドイツのバルカン電撃戦の成功につれて、アラビヤ半島の一角イラクに反英抗争の烽火が掲げられた。

イラクは世界大戦後イギリスのお手盛りによつて成立した王國ではあるが、曾ては英國の三C政策(カルカッタ——カイロ——ケープタウンを繋ぐ印度保障政策)とドイツの三B政策(ベルリン——ビザンチン——バグダットを連ねてベルシヤ灣進出への世界政策)とが鎬を削つたところであつた。即ち英國が一八三四年トルコからユーフラチス河の航行權を獲得すると、ドイツはトルコを動かしてバグダット鐵道の布設權を獲、コニ

ヤ（トルコの中部都市）からバグダットを経てバステ（南端ペルシャ灣に臨んだ都市）に至る約二千四百軒の鐵道布設に着手した。これには英國も一大恐慌を起したが、世界大戦が起るや、英國は印度より兵を進めて遂にトルコと共にバグダットを占領したのである。

イラクの住民たるアラビヤ人は、此の機會にトルコの露絆を脱せんとして獨立運動を起し、一九二〇年八月セーブル條約で、國際聯盟保護下に一獨立國となつたのであるが實質的には英國の委任統治領であつた。

英國は委任統治權で一方多年の不安を除くことが出來、他方豊富な油田を手中に收めたが、イラク國民の純然たる獨立國とならんとする希求の熾烈なるに手を焼き、遂に一九二七年十二月英伊間に獨立に關する條約を締結し、一九三二年十月國際聯盟國となつて完全獨立を確保したのであつたが、未だ獨立の經驗淺き國の常として政情の安定を缺き、内閣の更迭は頻繁を極めてゐた。

かくの如く曾ては英獨爭覇の地であり、其後は英國子飼ひの國であつたイラクが、當時その同盟國たるイギリスに對し第一の砲火を向けたことは、全アラビヤ回教徒の反英抗爭の燃ゆるが如き意識に油を注いだものであつた。既にシリヤ、パレスタイン等のアラビヤ人は反英デモを開始し續々イラク救援の行動に出でんとする報が傳へられた。當時既に頽勢顯著なる英國が、從來のアラビヤ人の叛亂の如く容易にこれを鎮壓し得るや否や、甚だ疑問とされてゐた。殊に其の背後に樞軸側の動きも豫想されてゐたのであるから、英伊戰爭は一時的の下火を見ても、其餘燃の再燃は近東一面を戰禍の渦中に捲込ますには措かない。又これを動機として三億の回教徒は其の強靱な宗教的紐帶によつて應分の反英抗爭に出づることであつた。

もと／＼イラクの政情といひ軍備といひ、英國の敵でないのは初めから知れ切つたところである。然るに英國の駐兵上の條約違反も詰つて敢然起つて砲火を交ゆるに至つたのは日々の壓迫に對する積念の爆發とも見られるのであつたが、其の背後にあつた回教

勢力の支援と樞軸側の對英攻勢の進展を見込んでのアラビヤ人解放の所謂聖戦に出でたものとは思はれるのである。假令、イラク政府がそこまで計畫を持たないとしても、其の抗争が相當の時日を持ちこたへてゐれば、ドイツの攻勢は自然にアラビヤ人の聖戦を促すことになり、こゝにも英國勢力を驅逐しての新秩序が建設され得たであらう。併しこれが爲めにはアラビヤ人にも回教徒にも個々の小我的抗争を避け、大乘的民族の興隆に目醒めなければならなかつた。

近年に於ける回教民族の復興は、將來の國際動向に重大なる影響を及ぼすことは疑を容れない。假令、其の復興が尙ほ建設乃至地均工事中に屬するものが多く、國際政局上未だ大なる働きを醸し得るの域に達せずとするも、既に嚴然たる事實に依つて久しく亡國の民として異種異教の白人下に虚脱の境遇に置かれた回教民族に起死回生の精氣を吹込んだことは、民族興亡史上にも重大な意義を齎らすものである。

曾て絢爛たるサラセン文化を以て西歐の暗黒を照した回教民族は、今や彼等の脈管に

傳はる祖先の血は現に存する宗教的熱狂と相和し、一度び死灰に瀕した彼等民族精神に一道の光明が點せられたのである。彼等が貧弱なる現狀に甘んぜず、幾多の桎梏を排して白人と對等の位置に立ち、獨立自治の生活を全ふせんとする熱望に燃ゆるのは、彼等の民族的自覺を裏書するものであつて、其の獨立をかり得た回教國は著々として希望を實行に移しつゝあるのである。

併し、是等の覺醒も發展も將來の世界勢力たるためにはこれが中心勢力をして世界各地に散布する回教民族を惹付け、指導し、葵向せしむべき資格を備へなければ、回教世界は依然として單なる宗教的紐帶に繋がるゝ被壓迫民族の境遇を脱することは出来ない。然らば其の中心勢力が現在何れに存在してゐるか。

回教がマホメットに依つて創められ、マホメットに依つて弘布され、マホメットに依つて非歸依者の征服が開始された時は、マホメットは潑刺たる草劍氣鋭の信仰の中心であつた。マホメット没後數代の教主は克くマホメットの遺圖を紹ぎ、マホメットの遺業

を繼承して、更に之を完成擴充したものであつた。従つて回教弘通の中心は嚴として教主の一身に集まり、征戰拓土は宗教的熱烈さを以て各地に展開され、前代未聞の速度を以て擴大強化されたのである。これ實に宗教の弘布を籍つて民族の勃興を遂げたものであつた。當時メソポタミヤの首都バグダッドは世界交通の中心地であり回教文化の華やかな殿堂であつた。

爾後教主の分裂によつて其の中心を喪ひ十字軍の侵攻、蒙古軍の侵掠を経て、回教の世界統一は儚なき一場の夢と化した。新たに勃興したトルコ帝國は、西亞の天地に一生涯を劃し、首都イスタンブールは一變して回教諸國の文化的大樞軸となり、皇帝自ら教主を兼ね、そこに回教の新たな中心を作つたのである。

しかしトルコ人はもと／＼アラビヤ人ではない。その被征服民族が教主を潜稱して、却てアラビヤ王國を其の足下に靡かさんとしたのであるから、茲に回教の精神的歸依の中心を混亂して、民族的矜持は蹂躪されたのである。而かもトルコ帝國の地域は歐亞交

通の第一關門に當つてゐる關係上、トルコ帝國の對歐政策は此處に堅牢なバリケードを樹て、其の内部の回教國を封塞し、歐亞の交渉を遮斷してしまつたのである。これ聽て内部的抗爭を激化し回教國の自滅を早めるに役立つと同時に、之を歐洲文明と離隔して漸次近代文化の埒外に取り残されることゝなつた。斯くて東西の文化交流はこゝに遮斷されて、其後の回教國は榮養素の攝取から離れて虚弱の兒童に等しきものとなつた。この状態から一四九八年の喜望峰迂回の航路が発見され、歐亞連絡は海路によつて以前に倍して活潑となつたが、同時にトルコ、アラビヤ、ペルシヤ等の回教中心領域は一朝にして其の地歩と價值とを完全に喪失する破目に立至つた。

爾來三世紀に亘る鎖國状態は、僅かに舊來文化の餘喘を保つて虚脱の老體を近東の天地に横へてゐたに過ぎなかつたのである。然るに此間に於ける歐洲諸國の東洋植民地經略は近東を袖にして遠く東亞の地に根を下ろしたのであるが、奈翁のエジプト遠征によつて再び東西兩洋の再會は實現し、回教世界の再認識は東西連絡の陸橋として特に歐洲

帝國主義國家に重要視せられるに至つた。

殊に英國の東洋植民地の保障政策と、東洋貿易の發展策とは、近東各國に於ける勢力扶植に専念せしむると同時に露國の南下中斷に對して極力これが防衛策を講ずるに至らしめた。是に於て近東回教諸國は英露の角逐場裡となりその勢力下に漸次侵蝕されることとなつた。只此間、鎖國的色彩の濃厚であつたトルコの首都イスタンブールが、時代の波に押されて西亞、東歐の陸路連絡の一大中心地となり、トランス・バルカン鐵道の計畫と相俟つて、世界交通史上に活潑な歩みを踏出すこととなつた。

然るに一八七〇年の露土戰爭の結果、バルカン諸國はトルコの露絆を脱して獨立するに及び、回教の防障は逐次衰頹して、爾他回教國はトルコの運命と共に全く沈潜の途を辿るばかりであつた。

此時、この惰眠を覺ましたものは日露戰爭であつた。日露戰爭に於ける日本の勝利によつて、白人種の絶對優越に對する有色人種の盲信が打破された。日露戦後、我が國民

は伸び行く國運に氣を奪はれて、我が國の戰勝が世界の將來に對してどれだけの意義あるものであつたか事件そのものに對する充分な認識を持たなかつた。然るに外人側は之を教へてくれた。曰く

「ポーツマス條約によつて齎らされた變化は、日露戰爭が亞細亞國民の心意の上に與へた變化に比べると、殆んど比較に價しないものである。ロシアの敗北はアジア國民の眼には、ヨーロッパの敗北としか映らなかつた。その結果としてヨーロッパの威力には抵抗出來ないものだといふ迷夢が醒めて、新らしい希望が湧き出て來た。『アジア人のアジア——そのスローガンは、アジア大陸の隅から隅へと波及していつた。日本は妖術を使つてゐるかの様に、抄たるイギリスの同盟國から、一躍世界強國に進み、やがて太平洋上における支配勢力とならうとする氣勢を示すに至つた』と註、マーグリノトハリソ

ン著 Asia Reborn の一節

この戰爭の結果、ロシアの近東に對する壓迫は大にその迫力を喪つたが、之に代つて

英國の魔手は漸増した。だが之と同時に眠れる「沙漠の獅子」にも近代的覺醒の胚芽が萌して來た。其の烽火は先づトルコのイスタンブールに打上げられた。それはパンイスラム運動であつた。

パン・イスラム運動は、回教圏を打つて一丸となし、西歐侵入勢力を驅逐することであつた。汎イスラム主義の主唱者アブドル・ハミッド二世は、最初フランス革命の影響を受けて回教國內部の廓清新によつて社稷を救はんとし、從來動もすれば陥り勝ちであつた歐洲勢力への依存を一擲して専ら回教國間の合従連衡を策したのである。之を契機として所謂青年運動が起され、新トルコ運動、新波斯運動、新埃及運動等が陸續として叫ばれるようになったが、回教國全般に亘つて扶植された歐洲勢力の跋扈は、僅かに回教社會の内部機構の改革並に回教精神の復興宣傳に止まるを餘儀なくせしめた。

日露戦争から十年を経て世界大戦が始まつた。それは凡ゆる意味において政治、經濟、思想、總ての方面において人類社會の轉機を劃したのであつたが、日露戦争における日

本の勝利に出發した有色人種の覺醒は、それによつて一段と發展した。

その直接の原因は決して單一なものではないが、特に回教國に就て述べれば概ね左の如きものであつた。

エジプトは大戦の勃發と同時に、イギリスはこの國を保護國としたのであつたが、戦争の終結と同時にトルコの露絆からも、イギリスの束縛からも完全に獨立せしむることをイギリスは公式に聲明した。エジプト人はその公約に釣られて義勇軍を組織しパレスタインでもイラクでも英軍を援けて戦つたが、兵力の不足は懸て強制徴兵までして之を補はねばならなかつた。その上物質と戦費に莫大な負擔を課せられた。戦争が終つたときイギリスは最初の公約を嘯いてしまつた。エジプト人は不良少年に欺された生娘のやうにイギリスに喰つてかゝつた。イギリスはそれに向つて虐殺と投獄をもつて酬ひた。

トルコの外域、アラビヤ諸國でも同様に獨立を餌に聯合軍に起たしめて、トルコとの戦闘に協力させたが、やがて最初の約束に叛いてパレスタインはイギリスの保護下にユ

ダヤ國の建設が行はれることが明かとなり、アラビヤ人にとつて第二の聖地たるシリヤがフランスの委任統治地域となり、メソポタミヤも同様に委任統治國としてイギリスの手に委ねられ、獨立の許された地域は只ヘジャス一國に過ぎぬといふ譎詐に罹つたことが明らかになつて、アラビヤ人は眼を醒した。

トルコは聯合國から散々に虐められた中立を守つてゐたベルシヤは戰爭中からその直後にかけて、事實上イギリスの保護國になつた。

要するに大戰と其の結果は、英人に何等の道念なく、たゞ利慾と打算が彼等を支配してゐることを日々の下に暴露した。この過渡時代の大試練は、やがて英人に對する回教民族の正しき認識を深めることとなり、見事に舊來の因循姑息の傳統の桎梏を破つて、茲に回教的國家主義の樹立と國民的覺醒運動の生成を誘致したのである。

かくて世界大戰後も尙ほヨーロッパの露絆の下に喘いでゐた西亞の情勢は一變し、先づ第一にトルコはケマル派の蹶起とアンゴラの一戰に二十萬のギリシヤ軍を粉碎して奈

落のドン底にあつたトルコの國際的地位を一躍天に翔けらせ戰後全く崩壊したものと考へられた廢墟の中から、若い希望に燃えた新興國が躍り出した。僅か二年前聯合國が押し付けられんとしたトルコ分割のセーヴル條約は自然消滅の形となり、トルコ帝國の舊領土に於てトルコ人の多數を占むる地域は完全に奪還された。かくて内政上の變化は過去二百年間に曾て見ざる精銳な軍隊を創設し、世界に最も新らしき民主政體を樹立した。

それと同時にアラビヤの大部分が英、佛の委任統治下に置かれたが、ネジト・ヘジャスは怪傑イブンサウド王の下に獨立して、全く世人より忘れられてゐた舊アラビヤから新らしい狂信的な新進王國が生まれた。イラクは亦イギリスの委任統治に反抗し戦ひ抜いて獨立王國を出現した。イランは俊雄レザカーンに依つて完全に統一せられ、渠自身皇帝となつてイランを英人の支配より救済し、統一ある純然たるアジヤ帝國を建設した。アフガニスタンもイギリスの支配を脱して立憲王國となつた。埃及も亦半獨立を勝ち得

た後尙ほ頑強にイギリス帝國主義との闘ひを續けて來た。

以上情勢の變化はアジヤの西方に幾つかの完全なる獨立國を生んだことであつて、今迄英國の勢力下に呻吟してゐた回教民族に確に一條の生氣を吹込んだものである。固より是等の獨立國は建國日淺く未だ國際政局に大なる役割を期待することは出来ないが、偶々是等の諸國が歐亞交通の要衝に當つて其の包藏する資源に富んで居ることは、將來の政局に尠からざる影響を齎すべきは疑を容れない。而も是等新興國は皆回教國であつて、其の宗教的熱狂を以て目まぐるしい急テンポで痛快な轉換振りを示してゐる。斯くて、左程の發展を見なかつた前述のパン・イスラム運動に代つて、新事態の要求に促されて起つた回教國家主義が擡頭し、從來の孤立的、個別的、鎖國的の因襲をかなくなり棄て、今や統合的、團結的、進取的の一團となつて回教世界の再建に邁進せんとする機運を醸成したのである。

この回教諸國家の接近は、一方國內の歐洲化改革を促し、その政治、經濟機構の近似

性は、更に思想、感情の融和となり、茲に強靱なる宗教的紐帶を以てする白人抗爭の具體的な中心勢力を構成するに至つた。

即ち一九二一年トルコ、アフガン條約が最初に成立し、二ヶ年後にはイラン、アフガン條約が成立した。一九三二年以來、イラク對イランの波瀾が捲起つたが、後遂に多年の宿望であつたトルコ、イラク、イラン、アフガンの四ヶ國聯盟より成る「アジヤ協定」が一九三七年サードパッドに於て調印された。

又一方サウデ、アラビヤとイラクとがトランスヨルダン、エジプトを加へて盟邦となり、更にトルコとエジプトの友好協約も一九三七年に成立するに至つた。斯くして實現された回教國の對外的聯盟は、また實に回教世界の思想的中心をなすものであつて、將に明日の世界的勢力たるの地位を約束するものである。

而もこれ等協同體が世界の交通系統内に編入せられ、東部地中海の岸よりメソポタミヤ、ペルシヤ灣、又は陸路イラン、トルキスタン及びアフガニスタンを結ぶ大要路が英

國の魂膽によつて再現し、又これと共にバレスタイン——バグダッド——ベルシヤ灣に通ずる大公道の敷設を見、更に歐亞連絡の航空路は戦後特に著しい共通現象であつて英、佛、蘭、獨の諸國は、それ／＼國際航空路を近東地方に經由せしめるに至つた。

以上は西歐列強が採つて來た交通政策の實際であるが、この他回教國自體の經營に基く交通系統がある。これには先づサウデアラビヤのヘジャス鐵道の計畫及び經營、トルコのアナトリア鐵道敷設の成功、イランの南北縱貫鐵道の建設等を第一に擧げねばならぬ。この外回教國內及び其等相互間の自動車道路及び鐵道は近來頓に著しく發達を遂げ、かくして近東網は年々歳々益々伸張せられ、舊回教世界の分離孤立の状態が次第に解消すると共に漸次恐るべき回教徒統一が強化され、緊密化し明日の交通要路に巨體を横へることゝなつたのである。

而かも是等回教國と英國との關係は只因襲の力によつて繋がつてゐるのであつて、決して善良なるものではないのである。英國は夙に屬領印度への最短コースであるメソポ

タミヤ、ベルシヤ灣を管掌するため、十九世紀以來、併合政策を提げて東洋に君臨したのであるが、大戰後、事態の推移を察知して之を改め、回教國家主義の内容と併立する妥協政策を以て之に當ることにした。これに就て英國が一番ひどい目に遭つたのはアフガンで、ラワルピンデイ平和條約に於て事實上、ア國の獨立を認め、更にカブール協定（一九二一年）に於ては之を一層強化したかの感がある。

次に間もなくトルコに於ても新東洋認識の開眼手術が施されケマルバシヤが露國の使嗾により國內を統一した時以來、其の外交的態度は益々軟弱を示し、一九二〇年には全トルコ領より撤兵の止むなきに至つた。

英國の對ベルシヤ政策は一九一六年編制せられたサウス・ベルシヤライフル軍に依つて東部油田地方及びベルチスタン國境迄英國の威を逞ふしてゐたが、一九一七年にはベルシヤ軍をも合し、二年後には帝政ロシア没落につけ入つて主都テヘランに侵入した。其の結果、英波條約を結んでカジヤール王朝没落と共にベルシヤを英國の保護國として

了つた。この時がベルシヤに於ける英國勢力の全盛期であつたが、懸てレザシヤの新勢力が伸長して來ると従前の條約は一個の價值なき反古と見做され、英國は次第にイランの曠野より追はれて行つた。アングロ・パーシヤン石油會社は一九二〇年頃英勢力の膨脹に伴つて北ベルシヤ迄乗出してゐたのが、英波條約の廢棄と共に南方のみに局限されて了つた。一九三二年、レザ・シヤは新聞を通して舊ベルシヤが背負された不當條約を遂行する義務なきことを、宣言し油田地域をベルシヤの國有と見做すことゝした。

英國の蹉跌はこれに止まらず、イラク、シリヤ一帶の土地は英國が最も確實に掌握したものと思ひのほか、最初は單なる擬似國家と思はれたものが、本眞劍に獨立擁護に乗出して來たので一驚を喫した譯であるが、之は單なる局部的現象でなく、深く強く根を下ろしたパン・アラブの大運動の一部であつた。又パレスタインに於ける英の分割政策は近東に於けるアラビヤ人の反英意識を彌が上にも激昂せしめて如何なる對策も妥結を見るに至らず、英國の近東政策の癌として今尙ほ英政府の惱みの種となつてゐる。

エジプトも亦御多分に洩れず、この國に於ける英政策の軟化は著しいものがあつた。

スエズ運河の開通後はエジプトは英國の戰略的キーポイントであつたが、英國は回教國家主義の勃發と共にこの新興勢力に順應して行くと同時に一面に於ては自己の世界的地位も擁護して行かねばならない羽目に陥つたのである。十數年た亘つて之に對處すべき一石二鳥策を考究してゐた英國は、偶々イタリヤのエチオピア占領によつてエジプトのナイル上流地域が危險に陥つたのと伊の地中海行動によつて印度航路が脅威を感ずるに至つたので、此時とばかりエジプトとの共同作戰を中心とする同盟を結んだのである。

以上英國の近東政策は回教の國家主義勃興と反英意識の連繫によつて、將に累卵の危に瀕してゐるのである。此時イラクの反英鋒起と獨伊の對英攻勢に加ふるに印度の反英大鬭争の勃發とは、遂に大英帝國を最後の段階に追ひ込んだものであつて、英國として一葉落ちて秋を知るの嘆を發せしめたことであらう。

一、スエズ攻略

ギリシヤ戦線では英希兩軍の潰滅によつて、バルカン戦は線香花火の如く、獨伊兩軍の快勝裡に一段來を告げた。獨軍のアテネ入場と前後して殘敵掃蕩戦はベロポネス半島に移つたが、これとてコリント・バトラスを手中に收めた獨軍の猛攻の下には其の清掃も數日を出でなかつた。

これと同時に、エーゲ海における希領タソス、サモトラキ、レムノス島を占領した獨軍は、漸次その銳鋒を南下せしめてシラクデス諸島の攻略に着手することゝなつた。他方イオニヤ海におけるコルフ島、ケファロニヤ、ザンデ島も既に伊軍の占領するところとなり、今まで英艦隊の制壓下に孤立無援の悲境にあつた伊領ロードス島の連絡も漸く目鼻がつくことゝなつた。

殊に英軍の敗退と獨伊兩軍の追撃追爆が、どれだけ英軍並に英艦船に損害を與へたか

は未詳であるが、ドイツ側の報するところによれば、十六日以来一週間内に撃沈された英輸送船は廿三萬トンに上り、これに廿六、七兩日の撃沈を加ふれば實に廿六萬トン以上に達し、其の他大破損を受けた船舶數七十隻、兩者を合すれば獨空軍の活躍だけで英船の被害は約八十萬トンと見積られてゐる。

此の報道の眞偽は姑く措くとしても、英佛海空軍の絶大の援護下に乗船したダンケルクの敗退戦でさへ英船の喪失は三十萬トンに達したのであるから、今次の英軍のギリシヤ撤退には其の貧弱な援護部隊と、豫め計畫された獨軍の空爆とによつてダンケルク以上の惨敗を喫したことは想像に難くない所であつて、船腹の不足を啣ちつゝあるイギリスにとつては、取返へしのつかぬ大打撃と謂はねばならぬ。その他英巡洋艦、驅逐艦の被害も相當計上されて然るべきであるから、東地中海の英艦隊はこの一戦によつて多大の痛手を蒙つたものと見ていゝ譯である。

かゝる情勢の急變は、東地中海における主客の顛倒を來たし、今まで東地中海を我物

顔に振舞つてゐたイギリスの頽勢は、最早掩ふべからざるものとなつた。今後の礎伊攻勢に對し恐らく積極的抗戦は不可能となるのではなからうか。この點に關して第一に考へられることは、英軍の立場が漸次孤立無援に慘落して行くことである。曩に輿論と恃んであらゆる全權外交を以てその歡心を繋ぎ、獨軍の南下に對して近東並にスエズの側衛に當らせんとしたトルコは餘りに脆き英軍の敗殘振りに愛想をつかして、今や樞軸接近の態度を濃化して來た。又杖とも柱とも頼んでゐるエジプトの向背さへも漸次變調を來し、さきにイギリスよりの共同防衛の申込を拒絶した同國政府は、更にイギリスの對獨戰爭への卷添へを拒絶するの意を明にした。

又近東方面においても、イラクの反英政府の成立は、シリヤ、パレスタイン、サウヂ・アラビヤ等の汎アラブの反英氣勢に油を注ぐものであつて、この方面の英軍の立場を最惡に導くものとも觀られる。これ皆、イギリスの誘惑が悉くその國を亡ぼしたマザクしき現實を直視して是等小國が自己保存を反省した結果と見られ、英國威信のガタ

落ちを立證して餘りあるものである。

かくて獨伊兩軍の今後の作戦は、専ら孤立の英軍撃滅に向ければいゝのであつて、作戦進行上一先づ環境の整理が出来た譯となつたのである。そこで今後獨伊作戦の主目標は、當然イギリスの大動脈切斷に向けらるべく、其の方法として英艦隊を撃壊して東地中海の制海、制空權の獲得を先きにするか、またはスエズ攻略を先きにして地中海を糞詰り状態となし、英艦隊並に英陸軍の補給路を斷ち。逐次其の撃滅を圖るか、或は兩者を併用して一氣に英陸海兩軍の撃滅戦に移るか、問題となる。

元來作戦の本筋からいふと、海を渡つて陸上の大作戦を行ふ場合には、先づその海を制壓することなしには非常な困難を豫期しなければならぬものである。これはイタリヤ軍が開戦當初、相當深くエジプトに進入したに拘らず、アレキサンドリヤを根據地とする英艦隊の海上よりする砲撃によつて遂に退却を餘儀なくされた事實と、アルバニヤ戦線においても同様の運命を辿つたことを回想すれば、その然る所以が首肯されるであら

只、今次のバルカン作戦中、英艦隊が同方面に主力を集注してゐた時機に於いて北アフリカ戦線が獨伊軍の猛攻によつて形勢を一變し、リビヤ進駐の英軍を驅逐してこれを奪回し、逆にエジプト西境の要衝ソルムを占領して將にアレキサンドリヤ進撃の態勢をとつたことは、獨伊兩軍の巧に其の戦機を捉へた結果に外ならないのであつて、今後この方面に英艦隊がノサ張り出して來れば、また相當の困難に遭遇する事が豫想されるのである。現に英艦隊のトリポリ砲撃によつて相當の損害が傳へられてゐるのである。従つて今後のエジプト作戦にしても、近東作戦への進行にしても、この英艦隊を撃滅するか、無能化するか、驅逐するか、全戦局に至大の關係を及ぼすものとなるのである。否寧ろ、これが全作戦を好轉せしめたる前提條件となるのである。

されば今後、獨伊兩軍の作戦は恐らく英艦隊撃滅に其の主力を注ぐこと、思はれるが、これと同時に、英艦隊の撃滅にはスエズ運河の、閉塞が必要であり、少くとも同方面の

制空權掌握も必要であり、アレキサンドリヤの攻略も必要となるのであるから、ギリシヤ戦線慘敗による英軍の士氣沮喪の機を掴んで、更に猛烈にエジプト進攻を敢行するものとも見られる。ブクブクに於ける英機械化兵團に對する獨伊軍の包圍作戦に見ても、獨伊兩軍の猛攻振りが窺はれるのである。

これに對してイギリス軍は今後スエズの防禦態勢を如何に立直さんとするかといふと、先づ陸正面においては、目下エチオピヤ遠征中の大軍を至急エジプトに呼び戻し、マルサ、マトルーの要塞線に據つて獨伊兩軍を邀へて一大決戦を行はんとするもの、如くである。この場合、獨伊兩軍の機械兵團はその數からいへば五ヶ師團を出でぬと傳へられてゐるから、今後此の方面に集中し得る英軍の量と比較すれば、到底このまゝでは要塞線を突破して遠くアレキサンドリヤ、スエズの攻略は六ヶ敷からんと想像される、こゝに獨伊軍の増強が如何なる方法によつて行はれるか、問題となる。

またイギリスはスエズの側面防禦としてシリヤ、パレスタイン方面に大軍を集結した

獨伊兩軍の近東進出に備へんとしてゐる。また海上においてはクレタ島を固守してハイ
 フワ、アレキサンドリヤとの三角地帯に據り飽くまで東地中海の制海權を確保して獨伊
 兩軍の海岸傳ひの進攻を海上より阻止し、兼て獨伊兩軍の海上補給路に猛攻を加へんと
 する姿勢をとつてゐるものゝ如くである。

かくて東地中海の制海權爭奪戰はバルカン戰の終熄と共に俄然重大化して來た。

イギリスが開戰以來地中海艦隊を次第に増強し、歐亞交通の要路を確保せんがため、
 エジプト、ギリシヤを其の掌下に收め、こゝに植民地の大軍を集結して海陸鐵桶の陣を
 布いた時には、スエズの防禦も近東の石油資源死守の態勢も略ぼ整つたのであるが、ギ
 リシヤ戰線の慘敗は英軍の企圖を根底より覆へし、形成は日に／＼英軍を最惡の窮地に
 追ひ込まんとしてゐるのである。假令アメリカがスエズを交戰區域外に指定し援英通路
 を此の方面に拓かんとしても、それが實効を見るまでにはスエズの運命は決せられんと
 してゐるのである。

英軍がギリシヤの海空軍基地を自由に使用してゐた間は、海上作戰に於ても、空軍
 作戰においても、常に伊軍を制壓して東地中海を我物顔に振舞つてゐたが、此の敗退によ
 つて、英軍のこの戰略的優位は完全に喪失され、之に反して樞軸の作戰基地は決定的に擴
 大され、從來イタリヤ本土及びシチリヤ島だけしか利用し得なかつた樞軸側は今やギリ
 シヤ本土及び港灣並にイオニヤ、エーゲ兩海に散在する島嶼が自由に作戰行動の基地點
 をなすに至つた。殊にエーゲ海の完全支配はトルコの歸趨を決定せしむる重大の役割を
 なし、延いては樞軸の近東作戰に一大通路を開くの機縁となり、イギリスの東地中海及
 ビエジプトに於ける地盤は、海に在ては獨伊の空軍並に潜水艦の奇襲作戰に脅かされ陸
 に在てはリビヤ方面よりの進攻の他に北方からも脅威を受けることゝなつたのである。

この戰略的地位の逆轉は樞軸側の今後の作戰に至大の便宜を與ふることゝなり、英艦
 隊擊滅にも充分の自信を持ち得ることゝなつた譯である。それにしても差し當り尙ほ英
 希軍の幡居するクレタ島の攻略は、爾後の作戰を有利に展開する上からも眞先きに着手

さるべきであつた。

二四四

三、クレタ島攻畧

ギリシヤ作戦の完勝は、東地中海における獨伊軍の戰略位置を有利に轉換したものであつたがペロポネソス半島の前面に横たはるクレタ島が英希軍の手中に残され、エーゲ海の南方を扼されてゐては折角から得た有利な態勢と英海空軍の障害を受けて思ふやうに活用することができない惱みがあつた。

そこでどうしてもギリシヤ作戦の畫龍點睛を行はんとすればクレタ島攻畧は必然の目標であつた。しかしクレタ島はペロポネソス半島から約九十哩の距離にあり、その西北部のスタ灣は天候の如何に拘はらず大艦隊を收容し得る良港であり、イギリスは一昨秋伊希戦争の開始と共に海軍基地をこの地に移し英後移駐後短日月間に相當の設備を施してこれを死守せんとしてゐたのであるから樞軸側のクレタ島攻畧は伊艦隊の大活動によ

るにあらざればその上陸作戦は容易ではないと思はれてゐたのである。

殊にギリシヤ慘敗の東地中海に於ける英軍の配備はマルタ、クレタ、キプロスを連ねる北方の一連とトブルク、アレキサンドリア、ハイファの戰略地點をつらねて、あくまで東地中海の制海權を維持し樞軸側のリビア作戦を牽制し、かつ近東進出作戦を極力阻止するにとめんとしてゐるのである。しかもその中に於て最も重要視してゐるのはクレタ島であつて、その位置がエーゲ海を管掌し、ロードス島を遮斷し、かつキプロス島とともにトルコ監視の役目をもはたし得るのであつて、いはゞ前記戰略の大黒柱に相當するのである。従つて同島の攻防は東地中海作戦における天王山と見なさるべきものであつた。もし英軍がこれを喪へば戰略圏の全面的崩壊となり、樞軸これを攻畧し得ざれば、リビア、近東作戦も意の如く進捗し得ざる憾みがあつたのである。もつともギリシヤがイギリスの與國として存在してゐた限りはクレタ島は英軍にとつて左程の重要性を感じなかつたのであるが、ギリシヤが樞軸の手に落ちた今日、假令、マルタ島がなほシ

二四五

チリヤ海峽に睨みを利かしてゐても、クレタ島の争奪戦は東地中海支配に關する死活の問題となつたのである。

これに關して昨年五月七日英首相チャーチルは下院の政府信任案討議の席上、次の演説をなしたことが想起される。すなはち「エジプト、スエズ運河、東地中海の支配、マルタ島の喪失はわれ／＼が受け得る最大の打撃であらう。われ／＼は英帝國の資源を動員して右の確保のため戦ふであらう」と、實にクレタ島の持つ戦略的地位から考へると、イギリスがクレタ島を確保してゐる以上、ギリシヤとリビアとの連絡は絶対に不可能であり、キプロス島に英海軍がゐる以上、獨伊とシリアとの連絡線は常に危殆に瀕するのであつた。換言すれば獨伊がアフリカ作戦を完遂せんとすれば先づクレタ島を攻略する必要がある、シリヤ作戦を大規模に行はんとすればクレタ、キプロスを先づ取らねばならぬ。それに差當つての問題としては既にイラクに送られた獨爆撃機に對し十分な補給を行ひ得ないことで、一度クレタ島を奪取すればキプロス島攻撃も容易となり、英地中

艦隊といへども小アジアに近づく事は困難となるばかりでなく、常に獨空軍の危険に曝すこととなる。従つてイギリスからいへばシリア、アレキサンドリア防衛のためにはクレタ島保持は絶対に必要であるのであつた。

またこの攻防戦を戦術上からみると、ドイツが制海権なくして敵前上陸を敢行することがやがて英本土上陸作戦に多大の示唆を與へる事である。ペロポネッス半島から海上約九十哩は英佛海峽より遙かに遠いが、一方クレタ島の防備は英本土の如く鐵壁のかためとはいひ難く、ドイツが如何なる秘策をもつてこれが攻略に従事し、英軍が如何なる手段によつてこれを邀撃するかは頗る興味を持たれる問題であり、來るべき英本土上陸作戦に對して多大の教訓を與ふるものであつて、飛行機勝つか、艦隊勝つか世界の注視を惹いてゐたのであつた。

果然ドイツは約一ヶ月の沈黙を破つて五月廿日早曉、落下傘部隊、グライダー部隊、空輸部隊を總動員して空からのクレタ島攻撃を開始した。これに對してクレタ島の英守

備軍はフレイバーク少將を司令官とする英本國軍、ニュージランド軍、ギリシヤ軍、等の混成軍約三個師團であつて、ギリシヤ敗退後は獨軍の攻撃を豫期して防備強化につとめてゐたのであつた。また海上においてはスダ灣を根據として相當の海軍兵力を配置してゐた。加ふるにギリシヤ政府も同島に亡命中ではあり島民もギリシヤ最後の領土を死守せんとしてゐたのであるから獨軍とのクレタ島攻防戦は激烈を極めるものと豫想された。

しかるに獨軍の上陸開始、後僅か二日にしてギリシヤ政府は再びカイロに逃げ出し、これと共に英空軍も同島より總退却し、かつ海上では獨伊空軍は英艦隊に大猛撃を加へ巡洋艦四隻、驅逐艦數隻を撃沈し、更に廿三日再度の攻撃によつて英驅逐艦以下八隻の撃沈が傳へられ、クレタ島に於る海空戦の結果、クレタ島水域における英軍の供給路は頗る危険に瀕してゐたのである。従つて英軍の増援部隊派遣は殆ど見込みなく、これに引換へ獨軍の空輸部隊は引も切らず増派され、クレタ島作戦は日に日に獨軍に有利に展

開され、進撃四日目でその西部全體の確保が報せられた。

クレタ島の攻防戦によつて英軍の防禦配備は著しく破綻を生じ、海上兵力の損傷と、空軍の減耗とはやがて獨伊制空權下の戰場と化するのみならず、イラク戦線の擴大と反英回教徒の蜂起と、獨伊兩軍の近東進出とは、孤立の英軍に對して東西狹撃の苦境に立たしめることゝなつた。しかも英軍の防禦體制の根幹をなす海上勢力が、獨伊の作戰基地の前進とともにこの猛爆下に逐次無能化するに至らば、スエズ攻略は時間の問題となるのである。

かくて英地中海艦隊の退嬰萎縮は、勝誇つた獨伊聯合軍の何物をも恐れざる勇進に輪をかけ、その自由奔放の跳梁にエジプト一帯をまかすことゝなるは必然である。ことに北阿にをける獨伊空軍の前進は、クリートローデ兩島の空軍基地と相俟つて東地中海の制空權は、概ね樞軸側に掌握されてゐるばかりでなく、潜水艦の集結もこゝを先途と進められることを思へば、英軍の西亞よりの増援は、果してスエズ攻略までに間に合ふか

どうかさへも疑はれるのである。

かくて既にロメル元帥の率ゐる獨伊聯合軍のアレキサンドリアの攻略、ナイル三角地帯の占領も最早時間の問題となつた。この時、エジプト國內の混亂と反英氣勢の昂揚は、延いて全アラビア人の蹶起を促すことゝもなれば英軍は全く噴火山上に亂舞することゝなり、印度全土に擴大せる反英鬭争といひ、アイルランドの反英氣運濃化といひ、崩壞に瀕する大英帝國はいづれにその終焉の地を求めんとするのであるか。

四、シンガポール陥落の意義

我が皇軍は大東亞戦争開戦以來戦史未聞の戦果を挙げ、殊にマレー戦線に於て驚異的な進撃を續けて、遂に英國が東亞の據點として來たシンガポールを陥落に至らしめた。

英國にとつてシンガポール失陥により來る影響は、致命的のものであつた。これはまたアメリカにとつても至大であつた。その軍事的見地から見れば香港、マニラ陥落後に

おける時、それは米英の軍事的勢力の東亞よりの總敗退を意味するのであつて、今迄米英の戦力に頼つてその陣營内に協同の運命を荷つて他を顧みなかつた蘭印、濠洲、印度等は、自然に米英の戦力に不信の念を抱き、自己防衛に反省の眼を開き、そこに共同戦線の内部抗争を醸成して到底統一ある行動を執ることが出来なくなる。殊にABC D對日包圍陣などもシンガポール大軍港が基點となつて設計されたものであつたが、その元締が皇軍の手に握られたことによつて、その企圖は根本的に覆滅して、對日策戦は絶望的となつたのである。

然かも皇軍一度びシンガポールに倚れば、東南蘭印の海域を制壓して遙にその銳鋒を濠洲ニュージールランド、其の他西南太平洋に碁布羅列せる米英領有の島嶼にも伸ばされ、米英の據點を太平洋上から殆んど一掃して彼等をして一指をもこれに染むる能はざらしむるに至つたのである。又西すれば印度洋を制壓し、英帝國の寶庫たる印度の反英を促し、ビルマの協力を得る處となり、之等を英本土より遮斷し、かねて獨伊のスエズ攻略

と相俟つて歐亞の海上連絡を完成し、そこに對米英戰に關する實質的共同作戰が展開されることとなるのである。この連絡を確保するといふことは、歐羅巴と亞細亞との間の有無相通の關係を助長して、日本の方に足りないものは歐羅巴から送つて來る、歐羅巴で必要な資源は亞細亞から送つてやるといふことになり、お互の必要物資が交換されてこゝに大きな、いはゆる世界新秩序を醸成することが出来るのである。また同時に、高度國防國家が樞軸陣營において十分に出來得る態勢になる。斯様な點からシンガポールの陥落は次の印度洋制壓に大きな意義があつたのである。

それと同時に樞軸側においては日本の緒戰の大勝利によつて活を入れられてゐる。それは獨伊がスエズの攻略から地中海作戰を發展し、イギリスの地中海艦隊撃滅作戰を促すことであつた。

また一方においてイギリス本土に對するいはゆる逆封鎖を次第に強化して、イギリスの本土を糧食難、或は資源難、資材難に陥らしめて、一部は英本土上陸作戰の規模を益

々強化致し、機會を掴み次第英本土上陸を企圖するのではないかと思はれる。かくてイギリスの勢力を歐羅巴から米洲へ驅逐し、いはゆる新秩序建設の大きな廣域經濟圏といふものを確立し、自給自足の態勢を調へることが出来るだらうと思はれる。

かくの如くにして、スエズが陥し、紅海が樞軸側の手によつて確保される。そうなる、印度洋を制壓した日本とはそこで手が握られることになる。斯くて海上の交通が頻繁に行はれることになり前述の如く有無相通の關係——即ち亞細亞はどちらかといへば原料國、歐羅巴は機械類その他各種製品の生産國といふことになり、この情勢の下に相通の有無相通の關係が結ばれるのである。シンガポールの陥落は以上の如き重大な意義を有するものである。

五、ビルマの建設協力

ビルマ作戰はマンダレーの攻略によつて一段落を告げ、其後は殘敵掃蕩とビルマ建設

に對して一層積極的行動が執られた。

この作戰に於て絶えず皇軍に協力したビルマ義勇軍並にビルマ民衆の反英義憤は、この機會を籍つて英印軍に對して爆發したのであつた。彼等は皇軍の道案内となり、英印軍のゲリラ戰を封じ、英印軍の敗竄兵を捕虜となし、或は皇軍の進撃を箠食壺漿して迎へてわが兵站線の確保に協力するなど、わがビルマ作戰に貢献したことは洵に感服するに値するものがあつた。またこれと同時に英印軍に協力した蔣介石軍に對して敵地にあるの思ひをなさしめたのも等しくビルマ人であつた。今や皇軍によつて英勢力を驅逐したビルマは、再生の思ひをなし、大東亞共榮圏の一環となつて彼等の宿望を達成する日の近きを悦んでゐるのである。

印度の東に連り、支那、佛領印度支那及びタイと境を接し、六十七萬六千平方呎の土地と一千四百萬の人口を持つビルマは、一八八六年征服されて英領となり印度の一州とされたのである。

ビルマが印度に併合されて以來印度資本の侵入によつて、ビルマ人は政治的にも、經濟的にも壓迫を受け、漸次印度人とビルマ人との對立が激化された。且つ印度人は大體ヒンヅー教及び回教徒であり、ビルマ人の大部分は佛教徒であるので宗教的にも、ビルマは印度と異つてゐる、兩者は水と油とであつた。

そこで印度とビルマを全然分離すべしとの議論が起り、一九三〇年六月印度の統治法調査を目的としたサイモン委員會は、即時分離を主張したのであつたが、ビルマ統治法改正案は一九三五年英國議會を通過し、一九三七年四月一日から自治を許され、英國皇帝を代表する知事の下に、上下兩院を持つところの政治が布かれた。

元來ビルマは極めて天産に恵まれた國であつて農産として米及び棉花を代表的なものとするが、鑛産に於ては石油、鐵を多量に産しその他錫、亞鉛、金、銀、マンガ、タレグステン、ボーキサイト、モリブデン、コバルト、チタニウム及びアンチモニー等頗る多い。而してビルマの貿易は年々出超なのに一般のルビマ人の生活は極めて貧弱であ

る。これは英國資本及び印度資本が絶對的に勢力を有つてゐるがためであつて、石油、鐵その他の鑛業を始め殆ど皆その主要な産業は英國人の獨占であつた。

かうした經濟的事情が、ビルマ人を驅つて反英運動に追ひやつた重大原因であつたが、さらに人種的宗教的原因がある。それは現在の人口千四百萬人のうち、ビルマ人は約一千萬人で印度人は百萬人居に過ぎぬが、印度人の經濟的勢力は英國の勢力を背影としてかなり大きなものであるから、印度人に對するビルマ人の感情は頗る悪い。かゝる理由によつて醸し出される反英、反印の動きは、ビルマをして第二のバレスタインたらしめ、英國の頭痛の種となつてゐたのである。

かゝる状況の下に反英運動の烽火は一九三八年七月にラングーンにおいて揚げられた。その直接の動機は回教徒の或る印度人がその著書の中で佛教徒の惡口を書いたといふのでビルマ人は非常に激昂し、七月廿六日ビルマ人群衆の印度人襲撃が行はれ、鎮壓のため繰出された軍隊と衝突して百八十名の死傷者を出した。

一方各地においては工業労働者の罷業や、小作爭議が續出し、僅かに軍隊の力をもつて鎮壓することが出来た。ところが一九三九年一月八日再びラングーンに擾亂が起り、一月十日にはシユエダゴン・バコダにおいてビルマ人のビルマを標榜する急進愛國團體フタキン派の指導の下に國民大會が開かれ、激烈な反英運動を展開。「英國統治絶對反對」「ビルマをビルマ人の手に返せ」と叫び、つひに一月十六日親英内閣のバモー内閣は辭職したが、これは單なる倒閣運動ではなくして純然たる反英運動であり、共産黨も國粹派も合同しての反英抗爭であつた。爾來この運動は表面鎮壓の形を保つてゐたが、その暗流はいよゝゝ潜勢力を増してゐたのである。

かくて大東亞戰の勃發と皇軍のビルマ進入によつて、時こそ來れと、ビルマ人の反英氣勢は昂まり、東條首相の聲明によつて安心して皇軍への協力となつて現はれたのである。

第九章 南方共榮圈建設

一、南洋の地位

南洋に久しく巨體を横へて、東亞侵略の爪牙を磨いてゐた英米蘭の據點は、皇軍の赫々たる戰果によつて、今や悉く我が占領下に置かれることとなつた。

彼れ等は「熱帯を支配するものは世界を支配する」と唱へつゝ、銳意熱帯資源の獲得に努力し來つたが、これ等熱帯資源こそ實は南洋の資源に屬するものであつて、南洋こそ彼れ等の憧憬の對象であり、熱帯の支配は實に太平洋の支配を意味するのであつた。しかもいまや彼れらの希望は白日夢と化して、これ等の地域即ち南方共榮圈は大東亞共榮圈内に包攝されて、わが國の指導下に建設の巨歩を踏み出さんとしてゐるのである。

高い溫度、強烈なる日光、豊かな雨量、好適の濕度、豊沃な土地、これ等のすべては熱帯における資源豊饒の條件をなすものであるが、偶々これ等の條件を完全に具備する熱帯圏は、南洋を以てその随一とするのである。しかも其の資源は他の地域に見られざる特産物の多くを有してゐるので、その重要性は加重されるのである。

先づ農林關係からいふと、ゴム、砂糖、コブラ、カポック、椰子、麻、規那、タバコ、コーヒー、米、チーク材、その他多くのものがあり、また鑛産物としては石油、錫、鐵、石炭、クローム、鉛、亞鉛、ニッケル、マンガン、ボーキサイト、タングステン、銅などがある。これ等の内特に石油、錫、ゴム等の持つ經濟的意義は極めて重大であり、これ等は日滿支に於ては殆んど、或は全く得られないものであり、東亞共榮圈の自足經濟の實現上必須のものである。

さて、南洋がいかに資源豊富であつても、もしこれがわが領域から餘りに遠く隔つてゐるか、或は距離は比較的近くとも重疊たる山脈に隔てられるチベットや新疆邊などで

は大した利用價值を持ち得ない。ところが南洋は距離からいつても、殆んど日滿支に隣接してゐるのみならず、海路による交通が甚だ便利である。海運が陸運に比して二千分の一位の運賃で済むことは周知の事實であり、その點から見ても南洋は、經濟的に支那の奥地などよりも遙に日本に近いといへるのである。

しかるに南洋は殆んど未開發の處女地として残され、同時に無限の寶庫であるがため世界列強の爭奪の的となつた。このまゝ捨て、おけば、不自然にも他のブロック内に取込まれる形勢にあつた。元來西南アジア一帯がこゝ數百年來、歐洲諸國の植民地爭奪の最大目標とされたもので、帝政ドイツがいはゆる三B政策によつてこの方面に鐵道を敷設せんとして、英國勢力と摩擦を生じ、第一次歐洲戰爭の一大原因をなしたのと同様、今次の大東亞戰爭も、要するに日本の勢力が南方に自然に伸びようとするのを、米英が飽くまで阻止せんとしたためである。彼らの帝國主義的支配が東亞十億の住民をその搾取下に永久に苦しめんとすることは、わが國の正義觀から捨て置くことは出來ない。こ

の意味からしても大東亞諸民族の自主的協力により、眞の共榮圈を確立して彼れらをして各その所を得しむることは、日本にとつて公明正大且つ神聖な事業であるのである。抑々、從來南洋問題が我が朝野の關心を集めてゐたのは、蘭領印度、佛領印度支那を始め、英領マレー、ビルマ、タイ、ヒリッピンなどを含むいはゆる「南洋」が、現に我が産業の原料資材たる農産、鑛産、水産、林産などの各種資源の豊富なる供給地であり、また一億五千萬にも上る人口を包容し、それが一大消費要素となつて我が製品の恰好の販賣市場たるの役割を果し、且つ邦人の各種企業の対象として最も手近なしかも危険率少き有利な投資地帯であると考へたからである。従つて我が國の南方政策は主として通商、企業の増進にのみ向けられたのである。しかるに此の經濟的平和政策に對しても、種々の猜疑や障礙に妨げられて近年頗る沈滞の狀況を示してゐたのである。

しかるに今次の支那事變と歐洲大戰の進展とは、南洋をしてかゝる状態のまゝに放置し難き情勢を齎らして來たのである。しかも此の情勢を促した直接動機として、第一に

は日本勢力の實質的南進によつて東亞新秩序の建設が企圖されたことであり、第二にはドイツの歐洲席卷によつてヴェルサイユ體制の全面的崩潰をみたことである。この二大事實は今や世界史上に重大なる變革を畫し、舊來の世界秩序を崩潰せしめて新しき世界秩序を誕生せしめんとしてゐる。この時に當つて南洋のもつ政治的、經濟的、軍事的の重要さが、我が國民の眼前にクローズ・アップされて、我が對南政策はこゝに一大飛躍を見るに至つたのである。

元來、日本と南洋との友好關係は古くから行はれて、我が經濟的進出も徐々ながら何等の障礙もなく營まれて來たのである。それは日英同盟の關係もあり、英蘭共に通商自由主義を採つて來たからでもあつた。また我が國力も何ら彼等を脅威するものでなかつた。しかるにその後の國際情勢の變化、特に第一次世界大戰の結果は各交戰國の疲弊に引替へ、我が國はむしろこの戰爭によつて異常な國力の膨脹を遂げ、且つその軍事的能力を南洋並に地中海にまで發揮して、戰後押しも押されぬ世界五大強國の一となつてし

まつたのである。この有色人種の一大強國の出現は、ウキルソン米大統領の民族自決主義の提唱とともに、他の被壓迫有色民族に一大覺醒を促したのである。このことあつて以來、殖民地の搾取經營をもつて傳統政策となす白人國、並に支那を半殖民地化して白人共同の搾取市場たらしめんと企つる諸國から、好ましからざる相手として日本を曲視するに至つたしかも其の後に於ける世界經濟恐慌の波に乗つて我が國商品の驚異的進出は彼等をして更に日本を嫉視せしめた。一度びかゝる雰囲気醸成された以上、日本と南洋との間は、最早昔日の友好的關係を持続することが出來ず、何か奧齒に物の挟つたやうな空氣の中に推移して今日に至つた。その間、イギリスはオツタワ協定を経て大經濟ブロックを構成し、フランス同様極端なる保護政策を採用し、蘭印また之に倣つて各種の制限令を布き、日本の經濟進出は現状以外殆んどその望みなき有様となつた。

時恰も支那事變は勃發し、戰局の擴大とともに我が實力は著るしく南進し、多年老獪の手段によつて南支一帶に喰込んでゐた英佛の勢力を逼息せしむるに至つて、東亞の形勢

は一變したのである。

事變が南方に發展して、日本が廣東を攻略し、海南島を占領し、新南群島の領有を宣言したことによつて、英、米、佛、蘭などの南洋關係諸國に與へた衝動は、當時我が國民がその方面の影響に對して比較的無關心な態度を示したのに比して遙かに大きなものがあつたのである。それは豫てより心配してゐた日本の南進が逐次現實化して今にも自己の頭上に降りかゝつて來るものと彼等の目に映じたからである。

我が國の援將ルート遮斷の目的によつて廣東、海南島、新南群島が占領せらるや、偶ま香港を新嘉坡より遮斷し、佛領印度支那に現實の脅威を與へることから、英、佛の焦躁狼狽はさることながら、アメリカまでが「支那を弱むるための軍事上の必要よりも、遙かに他に多くの企圖が今回の行動の裏に潜む」と號し、我が南進政策に關し極めて濃厚なる猜疑心を表明したのである。蘭印またこれと前後して一種の恐目的揣摩臆説に捉はれたのである。曩の世界大戰當時においては我が國は日英同盟關係にあり、支那に對

する日本の勢力は僅かに滿洲に限られてゐた。日本海軍の實力も今日のものと比較して遙かに劣勢なものであり、空軍は殆んど零に近かつた。また南洋に對する日本の商業的進出も世界戰爭中の出來事であつた。それにも拘らず、オランダ政府が日本の蘭印攻略を危惧してゐたことは非常なものがあつた。それにはドイツの強要によつて無線電信の使用等、蘭印の中立違反行爲がしばしば問題となつたことが原因したのであらうが、日本が機會あらば蘭印に進攻するものと思ひ込んでゐたからである。またこれと關連してイギリス政府も日本の南洋に對する野心を疑つて、殊更に戦地の局限を提議し、赤道以南の軍事行動に制肘を加へたことなどを考へると、彼等が日本の南方進出の當然性をその時から肯定して、これに對する不安の念に驅られてゐたことが想像されるのである。されば戦後イギリスが巨萬の國帑を費して新嘉坡大軍港の建設に着手し、對日據點の完成を急いだのも十二分の謂れあることである。

然るに今次支那事變において、日本の勢力が遠く南方に進出し、支那全海面は擧げて

我が制海權下にあり、加ふるに東洋における無敵空軍はこれまた東亞の制空權を掌握して、何時如何なる方面の進攻にも即應し得るの姿勢を取つた。また一方我が對南經濟力は種々の制限令に制約されながらも、今や牢乎として抜くべからざる地盤を持つてゐる。かゝる情勢の下に更に歐洲においては獨對英佛戰が開始され、オランダまた戰爭の過中に卷込まれる虞れが多分にあつたのであるから、これら何れも南洋に關係を有する諸國が、從來日本に對して抱いてゐた危惧の念に一層深刻を加へたことは想像に難くない。イギリスが新嘉坡の防備を強化し、オランダ政府が蘭印海、空軍の増強に焦慮し、アメリカの輿論がヒリッピン獨立の再檢討を要求し出したことなどはみなその現れの一端と見ることが出来る。

その時丁度ドイツの北歐電撃戰が開始され、獨對英佛戰がやゝ本格的性質を帶ぶるに至つて英佛側からドイツのオランダ進入説が傳へられこれが對抗措置として、英佛側は、蘭白兩國沖合に機雷を敷設した。しかるにこれと前後してドイツのオランダ進入の場合、

蘭領インドは日本の占領するところとならうとのデマが頻々としてロンドン、ニューヨーク邊りから放送せられた固より日本は聖戰下において火事泥的の理不盡行爲に出づるものではない。しかし、我が國民は日支交戰中の援蔣第國群の行動に對しては多大の憤懣を抱いてゐた。もし彼等にして新たに現出せんとする日、滿、支共同體による東亞の新秩序建設を阻害し、もしくはこの共同體が從來南洋方面に確立した經濟的地位（南洋一千万の華僑を含む）が不當に虐待されるやうなことが起つた場合には、我が國民の痛憤は恐らくそこに一大爆發を見るかも知れなかつたのである。

かゝる國際雰意氣の興奮状態において有田聲明が發せられて、我が國の南洋に對する態度を明かにした。即ち昭和十五年四月十五日時の有田外相は新聞記者の質問に答へ、「日本は南洋諸地方就中蘭領印度とは緊密な經濟關係にあり、相共に東亞の繁榮に寄與しつゝある。故にもし歐洲戰禍がオランダに波及し蘭印がその影響を受くる場合には、有無相通、共存共榮の維持増進に支障を來すのみならず、東亞の安定及び平和の上より

も好ましくない。仍つて帝國政府は歐洲戰爭の激化に伴ひ、蘭領印度の現状に變更を來すが如き事態の發生については深甚なる關心を有するものである」との趣旨を聲明した。

この聲明が猜疑と不安とに尖銳化された世界の輿論に一大衝撃を與へたことは明かである。即ち翌十六日にはオランダ外務大臣ファン・フレフェンスは石射公使に對して「オランダ政府は現在において蘭印の保護を何國にも依頼してをらず。また將來もこれを他國に依頼する意思はないまた何國よりの保護の申出若くは干渉がありとするもオランダはこれを拒否すべき決意である」旨表明した。次で十七日にはハル米國務長官も蘭印の現状維持を強調する聲明を發して有田聲明に應ふるところがあつた。イギリスでは十八日下院においてバトラー外務次官の口より蘭印問題に關する日本占領のデマは一先づ一掃の形をとつた。

しかし、問題はこれで解決した譯ではない。南洋と日本との從來の歴史的並に通商上の關係支那事變處理に對する蘭太平洋の地位及び將來の日本の運命に對する東太平洋の役割等は歐亞兩局面の近く大に變革すべき事態を基礎として再考されねばならなかつた。果然、歐洲に於ては獨軍の白、蘭兩國への進入となり、歐洲戰禍の南洋への波及の危険はいよいよ現實の問題として切迫して來た。そこで東亞の安定就中蘭領東印度の現状維持に關し重大影響を及ぼす惧れがますます濃化して來たのに鑑み、帝國政府は五月十一日交戰國各國使臣を招致し重ねて左の申入れを行つた。

「蘭領印度が歐洲戰禍の波及を蒙ることは帝國との間の共存共榮の維持増進に支障を來すのみならず東亞の平和及び安定の上よりも好ましからざることなるを以て帝國としては蘭印の現状に何等かの變更を來すが如き事態の發生については深甚の關心を有するものである」

との帝國政府の態度及び決意を表明した。これに對してオランダ公使は本國政府の訓令に本づき「オランダ政府は蘭領東印度に關し英、米、佛三國は何等干渉の意圖を有せ

「さるものと信ずる」旨を答へ、獨大使は「本國政府の訓令に本づき、ドイツ政府は蘭領東印度問題につき何ら關與するの意思なき」旨を申述べた。その他大使は本國政府の旨を受け蘭領印度の現状維持方針には同感の旨を回答して來た。

然るにドイツの電撃戦はグン／＼英佛側の聯合軍を潰滅して、オランダ本國は消滅し、フランスまたその軍門に降ることとなつて、歐洲の新秩序は獨伊樞軸を中心として建設されることとなつた。尤も對英總攻撃は其後も繼續せられてゐたが、孤立無援に陥つたイギリスは最早何れに轉んでも大した發言權を持ち得ない状態となつてゐた。そこで對英作戦に自信タツブリなドイツは、既に歐洲新秩序の根本原則を案畫して、フンク經濟相をして七月廿五日これを中外に聲明せしめた、これより先、有田外相は六月二十九日「國際情勢と帝國の立場」との題目の下にラジオ演説を行ひ、南洋方面を包含した東亞聯盟建設の意圖を強調した。その根本趣旨においては略ぼドイツの歐洲新秩序建設の意圖と合致してゐる。即ち有田外相は「世界平和の確立は人類進歩の現段階では遺憾なが

ら一舉にして達成し難いものがある。故にこの理想を實現するためには地理的、人種的、文化的、經濟的に密接なる關係にある諸民族が共存共榮の分野を作り先づ其の範圍内における平知と秩序とを確立すると共に他の分野との間にも共存共榮の關係を樹立するところが最も自然な順序であらうと考へる。……東亞の諸國と南洋諸地方とは地理的にも、歴史的にも民族的にも將たまた經濟的にも極めて密接なる關係にあつて互に相倚り相扶け有無相通じて共存共榮の實を擧げ、以て平和と繁榮とを増進すべき自然の運命を有するのである。故にこれ等の地域を一括して共存の關係に立つ一分野となし、その安定を圖ることが當然の歸結と思はれる。かくの如く部分的に公正なる平和を建設し、これを集大成して世界全般の公正なる平和を建設せんとする考へは歐米諸國にも存する」と言つて世界新秩序の動向を示唆したことは、フンク獨經濟相の歐洲經濟國家聯合建設の趣旨と同貫異巧のものであつた。たゞ有田外相の演説は抽象的に大摺みの意圖を放送したのに過ぎなかつたが、フンク獨經濟相の發表は一、自由主義經濟の改革、二、歐洲經濟

國家聯合の登場、三、歐洲の經濟的目標、四、指標的通貨としてのマルク、五、金は何處に行くか、六、新歐洲貿易の針路、七、戰時産業から平和産業への轉換問題の七項に分けて説明されてあるので略ぼその針路を知ることが出來た。

かゝる歐洲情勢の激變に際して米内内閣は辭任し、第二次近衛内閣は衆望を擔つて登場した。そして其の基本國策の根本方針として「皇國の國是は八紘を一字とする肇國の大精神に本づき世界平和の確立を招來することを以て根本とし、先づ皇國を核心とし日滿支の強固なる結合を根幹とする大東亞の新秩序を建設するに在り」と發表し、この根本方針より發生する外交方針としては、蘭印佛印を包含する大東亞共榮圈の確立を圖り、この確立を通じ皇道を世界に宣布する皇國の使命達成のため、列強に働きかけて積極的に建設的施策を講ずることである。これがため我に同調する支那と提携し。不退轉の勇猛心を以て使命達成に邁進する旨を松岡外相によつて瞭にせられた。かくて我が國の執るべき南方への道は漸次闡明となつた。

二、新東亞の外交

大東亞共榮圈は、日滿支を東亞聯盟の中核とし、佛印、蘭印をその外核としてすべては全アジアに發展すべきものである。然るにアジアの大部分は歐米列強の殖民地乃至半殖民地化してゐる。従つて東亞に侵入せる既成勢力より東亞民族を解放することなしに東亞の新秩序は眞に建設さるべきでない。東亞は東亞人の東亞となつてこそ安居樂業の共榮圈は成り立つのである。他ブロックの領土なり、根據地なり、經濟策源地なりが存在して自由且つ奔放に東亞圈内の協調分擔業務を攪亂するの患を残して置けば。共榮圈建設の意義は大部分没却されるのである。即ち東亞共榮圈の持つ政治的意義は圈内諸國の政治的獨立を尊重しつゝ東亞の國家聯合を結成することであり、その經濟的意義は圈内の經濟一體化を圖つて自給自足の體制を整へ兼て他ブロック間との貿易を計ることであり、その軍事的意義は東亞に進攻する外敵に對して共同防衛の體制を確立すること

である。然るに日滿支三國の結合のみを以てしては完全なる自給自足經濟體制の確立は殆んど不可能であり、東亞の國防體制の確立には、その戰略的觀點から蘭印、佛印、比島、タイ、マレー等を含む全東亞諸民族の參加を必要とする。従つて東亞共榮圈の意圖する所は、歐米諸國が強制してゐた東亞の舊秩序を打破して、新しき東亞の秩序の中に東亞諸民族を再組織ことでなければならぬ。

蘭印、佛印、マレー等が、東亞の國防體制確立の上に重大な經濟的、軍事的、政事的價值を負擔することは言ふまでもないが、其の地理的にも歴史的にも、また其の獨立性保のためにも當然東亞共榮圈に包容さるべきものであつて。之が參加は東亞共榮圈の至上命令といふべきである。

日本は既に滿洲國と鞏固な結合が出来た。支那新政權とも東亞共同體としての堅き握手が交換された。この三國が日本を盟主として一單位となり東亞新秩序の中核として略ぼ其の形を整へることとなるが、その外核をなす蘭印、佛印、マレー等は曾て蘭印、

佛、英の殖民地であつた。併し彼等の本國は既に滅亡に瀕しつゝあるのである。しかして大東亞戰爭の展開はこれ等殖民地は我が攻略又は彼の協力によつていはゆる南方共榮圈の建設の途上にある。

今や大東亞戰爭はその戦果の擴大と共にその規模はますます雄大となりつゝあるのである。日本はいまや東亞の完定、東洋永遠の平和を念願するに止まらず、實に米英勢力を徹底に撃碎して。世界に公になる新秩序を樹立して、萬民をしてわが皇威の惠澤に浴せしめなければならぬ。

しかもその前提條件としあアジアにおける被壓迫民族の解放と、その週圍に金剛不壞の態勢を整へなければならぬ。しかもいまや皇軍の戡定によつて南洋地域一帯より敵勢力を驅逐し、彼れら住民の衷心の協力によつて、こゝに大東亞共榮圈の具體的建設に入らんとしてゐるのである。

三、南洋諸島の民族性

南方諸島の民族は多種多様である。是等の民族が今や大東亞共榮圈建設の大業に携はらんとしてゐる。而かも著しく構成を異にし特種の風俗習慣を持ち、文化の發達にも甚しく差違ある是等の民族をして、我が指導の下に協同の任務を果たしめんとするには今後多大の努力を費さねばならぬ。これが爲には我が國民も南方民族に就き一應の概念を持つ必要がある。

南方と稱しても其の地域は廣汎である。印度、濠洲も何れは共榮圈の一環となるべき運命に置かれてゐるが、本項に於ては紙數の關係上、世上に唱導されてゐる南洋諸島の民族に就き概説することとする。

フィリッピン

フィリッピンの先住民族は、ネグリストと稱する短軀の黒人であつた。彼等は南方か

ら移住して來たインドネシア民族やマレー族に漸次驅逐され。現在は山間に追込められて餘り姿を見せない。その後比島がスペインの領有に歸すると共にスペイン人とインドネシア族との混血が行はれ、今日の比島人を生み出したのである。併し、彼等の血の中には古くから渡來してゐた支那人を始め、バプアン人、アラビア人、印度人、マレー人、日本人等々の血も混つてをり、一蹴にフィリッピン人と呼ぶが、實際は幾多の種族の血統が混淆してゐるのである。

尙ほ原住民族のネグリストは。世界の人種中エスキモーと共に矮軀民族で、これも人種學的にはアメリカインディアンと同じく、民族的滅亡への途上にあるもので、今日彼等はルソン島、バナイ島、ネグロス島の山林中に住み、鹿、山豚、猿、鳥などを食つて生活し、財産といへば狩獵用の弓矢ぐらゐのやうである。

比島人は宗教上から基督教徒と非基督教徒とに大別され、更に後者には回教徒と異教徒とに區別されるが、基督教徒は總人口の九割一分を占めて居り、普通フィリッピン人

と呼ばれるのはこの基督教族を指すのである。尤もこの基督教徒にしても多くの種類から成る。言語もそれと違つてゐるが大別して左の八種とする。

グイサヤン族	四、九〇七、九四三人
タガログ族	三、一九一、〇四八人
イロカノ族	一、二一六、二七四人
ピコール族	八二九、二九二人
バンガシナン族	四二三、四五七人
バンバンガン族	四〇四、六二一人
カガヤン族	一五八、六四八人
サンバラシ族	六四、五六八人
合 計	一〇、一九五、八五一一人

人口の上からはグイサヤン族が断然優勢の譯であるが、政治的勢力の點からはグイサ

ヤン族とタガログ族とは相伯仲してゐる。これはタガログ族が首府マニラを中心に南ルソン地方に占むる地理的勢力關係のためで、コンモンウエルスの前大統領ケソン氏も、フィリッピン共和國の最初の大統領であつたアギナルド將軍も、共にタガログ族の出身である。次に優勢なのはイロカノ族で、勤勉活潑「比島の米人」と呼ばれ、また最も愛國的種族と稱されてゐる。またピコール族は「氣でユーモラに富み、バンガシナン及びバンバンガン兩族は勇敢な點で他の諸族に優り、カガヤン族は怠惰鈍重の悪評を受けてゐる。

一九一八年の國勢調査によると、非基督教徒の人口は七七五、二五四人で、このうち三七二、四六四人は回教徒モロ族であり、この外にイゴロット族イフガナ族、カリ族、ンギアネラ族等の異教種族がある。これ等種族は合計約三十八萬人前後である。

モロ族には十四五世紀頃アラビアからボルネオを経て比島に移住したものと、それ以前ミンダナオ島、イリアノン島に住んでゐて、回教に歸依したものがあつて、本來勇敢な

人種で、スペイン政府も幾度か彼等を征服せんとしたが失敗し、遂にモロの酋長たるストル島王に貢物を贈つて懐柔に努めた程である。イゴロット族は、異教徒中で文化の程度や、高く、その容貌が頗る日本人に似てゐるので、日本人の血が混つてゐると稱せられ、水田式の米の栽培にも長じ、平和的にして且つ勤勉な種族といはれてゐる。この他に、イフガオ族は尙武の風に富み闘争を好むといはれ、カリంగా族は曾て食人種の一つとして甚だ恐れられたが、今は家畜を飼ひ平和な農民となつてゐる。

比島人は早熟、早婚、早老で四十歳以上は老人の部に屬するといふことも熱帯民族の一特徴として注目に價ひする。

佛領印度支那

印度支那の住民は幾多の種族から成り甚だ複雑してゐる、土民中の大部分を占めるものは安南人とカンボチャ人とラオス人との三種族であり、この外、山岳地方に住む若干の少數種族がある。

安南、カンボチャ、ラオスの三種族は、何れもチベット、雲南方面、または印度方面から移住し來つたもので、印度支那の土着民族は漸次居住地を奪はれ、今では山岳地方に餘喘を保つてゐるに過ぎない。そしてこの山岳地方の種族は安南ではモイ、カムボチャではフノン、ラオスではカーと呼ばれてゐるもので、殆んど原始的生活者であるが、僅か一部の者が稍や他の種族に近い生活をしてゐる。

さて前記三大種族の中、安南族は最も多數を占め、佛印全人口約二千三百萬人中千六百八十八萬人を占め、七二・四%の比率を示してゐる。安南人に支那人と同じくモンゴロイド（類蒙古人）に屬し、一種の混血種族で、大部分トンキン、安南、交跡支那等の平地に住み、若干は高原地方にも住んでゐる。彼等は約十世紀間の久しい間、支那の支配下にあつたので、その文化や生活形態に於て甚だ支那式である。

カンボチャ族は約二百九十萬人で、全人口の一・七%を占め、居住地はカムボチャを本據として交跡支那にも及んでゐる。この種族はクメール族と稱せられ、土着種族とヒ

ンヅー人との混血種で、言語や文化の點に於て多分に印度の影響を受けてゐる。

ラオス人はタイ族の一分派でその數は十三萬七千人程である。タイ族はもと雲南地方から南下し、先住民族と混血したもので、トンキン山岳地方、ラオス地方及びタイ國へと分布したが北部ラオスに居住するものは概して未開状態にある。尙ほタイ族は、モンゴ系ゴの安南人やカムボチャ人とは違つてアリアン種族である。この外、安南、カンボチャ、ラオスの山地帯の奥には、文字を有しない獲猛な蠻族のインドネシア族が住み、また苗族、猿族、ミユオン族等の諸種族が若干住んでゐる。これ等の種族は一般に狩獵または原始的な植物採取によつて生活し、僅かにミユオンの一部のみが幼稚な農業を営んでゐる。

概して言ふと人口の七割以上を占める安南人は文化の程度も高し、最も統一されてゐるがそれだけ民族意識も強い。カムボチャ人は、昔から四隣の強敵と戦つて來たので民族的團結心は強い。ラオス人は民族が低く民族意識も稍薄である。その他の未開種族は

野蠻に近いので、佛當局もその馴致には相當手を焼いたものらしい。

蘭 領 東 印 度

蘭印の土着民は、ニューギニアのメラタシア系種族を除けば總てマレー族またはインドネシア族であるが、細別すると五十種乃至百種にも達する程複雑である。やゝ之を大別してもジャワに住むスンダ人、ジャワ人、マヅラ島に住むマヅラ人、スマトラの北部のアユチャ人、中部のメナンカボウ人、南部のランボ人、ボルネ人では海岸地方に住むマレー人及びダイヤ人、東北部のケニヤ人、中部のカヤン人、クレマンタン人、セレベスでは東北端のミナハサ人、北部のアリフール人、中部のトラヂヤ人、西部のブギス人、南部海岸地方のマカツサル人、小スンダ列島ではベリー人、ササ人、モロツカス群島ではアリフール人、ニューギニアではバブア人など屈指に違ないほどである。

従つてそれら言語風俗、習慣、文化、性格を異にしてゐる。例へばジャワやマヅラに住むものは人種的にも相當進化して居り男女共に禮儀正しく、氣質は從順で、容貌も

氣品があり、皮膚は褐色で體格は小格である。マヅラ人は體格もよく、勇敢でもあり勤勉でもある。スマトラのミシナンカボウは眞面目である勇氣に富み知的向上心も強く、また北方のアチエ人は剽悍で戰鬪的である。と同時に算數に長け商賣も上手である。和蘭統治に最後まで反抗を續けたのは彼等である。ボルネオ人はまだ原始的な生活の域を脱せず、セレベスのミナハサ人は基督教を信じ相當文化的である。ニューギニアのパプア人はいづれも原始的で、人喰ひ首狩りの蠻風も残つてゐると言はれてゐる。パプア（縮れ毛）と呼ばれるだけに、縮れ毛は彼等の特徴を成してゐる。

タイ 國

タイ國人の構成は甚だ複雑で、細分すれば二十種以上にも上るが、大別すればネグリト族、モン、アンナム族、チベット、ビルマ族、ラオ・タイ族及びその他の系統の五つになる。

普通タイ人と呼ばれ、人口の大部分を占めるものはラオ・タイ族で、この種族は約一千年前支那の揚子江沿岸から南下し、漸次先住民を驅逐してメーコン河流に居住し、やがて數世紀後には強大な國家を建設した。降つて十三世紀頃、クラビイの侵略に會ひ大舉南下してメーコンを渡り、メーナム河流域を中心に今のタイ國一帯に勢力を張り、その後幾多の變遷を経て今日に至つたものである。

タイ族もラオ族も殆んど同様で、その南下中モン族、及び支那人と混血したもので、共に蒙古人に類似し蒙古人的特長を多分に保有してゐる。宗教は専ら佛教に歸依し、言語はタイ族はタイ語を用ゐるが、ラオ族はクメール系の語が混淆してをり、またラオ族は多少皮膚の色が白いといふ相違を示してゐる。

チベット、ビルマ族は印度支那半島をイラワヂ河に沿ふて南下した種族で、この種類のタイ國に入り込んだのは比較的新らしいのであるが、その中のミャオ族は比較的文化水準が高く一見雲南人に似てゐる。同じくチベット、ビルマ族より派生したムーサー族は蒙古型で體軀頑健、狩獵に長じ山腹に住み、米、玉蜀黍、阿片等の栽培を行つてゐる。

モン、アンナム族は、チベット、ビルマ族よりも遙か以前に北方から南下した種族で、クメール族、安南族、マレイ族等は皆これに屬してゐる。この中最も多數なのはクメール族で、謂ゆるカムボチャ人である。風俗習慣等はタイ人と變りはないが、色稍や黒く有髯者が多い。モン族も外貌、言語、宗教等タイ人と同じであるが、只タイ人より稍々身長が高い。アンナム族は十七、八世紀頃、安南から逃れて來たカトリック教徒の子孫で、今日でもカトリック教を奉じ、安南語を用ゐてゐる。マレー人はタイの南部に住んでゐるが、彼等はアンナム族と混血したので純粹のマレー族とは相當體型を異にし、今では寧ろ蒙古人的特徴を有し宗教は回教を信じ、農業及び漁業に従事してゐる。

以上の外、ネグリート族に屬し身體矮小で毛髮の黒く縮れてゐるスマン族、ビルマとの國境山岳地帯に住む系統不明のカリエン族、英領マレイ國境に住む系統不明のサカイ族などがあり、なほ國籍上タイ人と稱せられながら支那移民の子孫たる支那人や、支那人の混血種も多數にある。

英領マレイ

マレイ半島は人種博覽會と稱せられるほどで、多くの異民族の集合地であるが、これは當地が元來移住地であつた關係で、ジャワ、ボルネル、スマトラその他の近隣地から或はそれ等を通じて、東西兩洋に亘る種々雜多な民族が移住し來つた爲である。併し英領マレイの人口内容を量的に支配してゐるのはマレイ人、支那人、印度人の約一割二分弱である。尙これ等三人種の中、マレイ人は主として農業に従事し、支那人は商、鑛、農及び一設使用人等であり、印度人は大半ゴム栽培業に従事し原住民としては僅に三萬人を數へるに過ぎないが、大體ネグリート族、サカイ族及びプロト、オレイ族の三種と見られてゐる。

ネグリート族はマレイ半島最古の種類とされ、ケダ及び上ベラ地方ではセマラン、ケラタンと呼ばれ、東海岸地方ではバンガンと呼ばれるもので身長矮小、毛髮は羊狀、皮

膚は暗褐色で、未だに舊石器時代を思はせる野蠻未開の状態にある。彼等は農耕を知らず、球根や果實の採取及び狩獵によつて生活してゐる。今日ではベラ州北部、ケダ及びケランタン州の各一部の原始林中に生存してゐる。

サカイ俗はクラカンサールからスランゴールの山間に住んでゐるが、彼等は他種族と混血してゐる。身體はやはり矮小で、毛髪は波狀、皮膚はネグリートよりも淡色である、生活様式はネグリートより可なり高級で既に移動耕作を知り、各種の藤細工などを行つてゐる。

第三のプロト・マレイ族は是また附近種族との混血が多く、南部パハン、ジョホールリオ、オリンカ諸島、スマトラ東岸に散在してゐる。毛髪黒く、鼻は扁平、顴骨著大、頭は圓形で、概して顔面身體共に貧弱である。生活は甚だ原始的で農耕を知らず、天然果物、狩獵、漁撈等によつて生存してゐる。

新マレイ族、以上は原始民族であるが、それがその後移住した新種民族は、ドイテロ、

マレイと稱せられる種族である。これは農民々族で、十二世紀頃からスマトラ方面から半島に渡り、周圍の先住民を驅逐し、漸次各地に擴大して半島の基本種族となつたのである。そしてこの新マレイ族の定着後、印度人、アラビヤ人、支那人等が相次で移住し、ますます半島の人種的要素を複雑ならしめ、その上歐洲諸國民の東漸となり、特に英國人の制覇となつて今日に至つたのである。

太平洋上の諸民族

太平洋上の住民は、大體これを左の五つに大別することが出来る。

その一はインドネシヤ族で、これは大體西スマトラから東はモルツカ群島及びアル島まで、南はジャワから北はフィリッピン、臺灣まで擴がつてゐる。

その二はメラネシヤ族で、これは大體においてニューギニアから東方へビスマルク諸島、ソロモン諸島、サンタ・クルース島、ニューヘブライス諸島、ニューカレドニア島、

フィジイ島等大體一八〇度子午線に至る諸島嶼に住んでゐる。

三はシクロネシア族で、これは西はパラオ諸島から東はマーシャル群島まで、北はマリアナ群島から南はヤルート島まで、大體わが内南洋諸島嶼に住んでゐる。

四はポリネシア族で、これはニューギニアランド及び一八〇度子午線以東の東太平洋諸島に擴がつてゐる。

五はオーストラリア族と呼ばれるもので、その居住地は濠洲とタスマニア島とである。これ等の諸民族は、往古インドネシアを通じて次第に他の地域に移動してゐたもので、原始から其の地方に住んで居たものではない。且その人種系統は白人、黄人、黒人のすべてを含んでをり、移動する間に各種族の間に幾多の混血も行はれた譯で、實際は極めて複雑多岐を極め、例へば純粹のメラネシア族とかいふものは案外少いのである。

上記五つの民族の特徴についても、混種等も多く且つ研究も不十分なため、今の所餘り明瞭ではない。だが、大體今日知られてゐる範圍で言へば、先づ最も原始的で且つ野

蠻なのはオーストラリア族とメラネシア族とである。

メラネシア住民はバプア族とメラネシア族とに区分し得るが、しかし此兩者は、オーストラリア族と同じくいづれも黒人系の種族で、アフリカ黒人を西方黒人と呼ぶのに對して、東方黒人と呼ばれてゐる。彼等は現存人類中最も野蠻な種族と見られてゐる。この中バプア族はニューギニア及びその附近の島嶼に住み、マレー語を話さぬ點がメラネシア族と異なつてゐる。

バプア族は鼻は扁平で、目が大きく、皮膚の色はチョコレート色であり、頭髮は縮れてゐる、彼等は原始林や湖沼や山地に住み、家は杭の上に建て、屋根は棕櫚の葉で葺いてゐる。首狩りや人肉嗜食が行はれ、今でも小屋の附近に髑髏を懸けて保存してゐるのが相當ある。主食はサゴ椰子とバナナであり、山地では山薯を喰つてゐる。

メラネシア族はバプアに比し廣額、直凹鼻を有ち、皮膚は同じくチョコレート色であるが頭髮は直毛で頭蓋骨はバプアより狭く、身長はやゝ高い。彼等は大體狩獵と淺耕と

を兼ね、栽培するものは日本の里薯に似たヤムとタロウ芋とである。彼等の生活は石器時代を出でず、石や木や貝殻や人骨で武器その他を造るが、武器は主に棍棒と弓矢と槍とである。

オーストラリア族も、前述の如く黒人系種族で、その原如性において大體バブアなどと變りはない。曾てオーストラリア族にはタスマニア人と濠洲土人との二種あり、移動時期も異なるものと見られてゐたが、この中タスマニア族は既に滅亡して、現在はオーストリア族のみである。この種族の體質的特徴はバブアと大した變りなく、頭髮は縮毛又は波状毛で、皮膚は黒褐色、廣鼻、狹頭、身長中位である。生活は現在狩獵段階にあり、男はカンガル、エミユ、袋鼠、野鴨等を狩り、女や子供は野生のヤム芋や蟲類などを採集する。彼等は甚だ野性的で、農耕は勿論家畜飼養も知らず、大部分は岸壁の下などに住むが中には樹枝などで粗末な家を作るものもある。

次に主として東太平洋から米洲にまで亘つてゐるポリネシア人は、住む地域によつて

文化の程度も若干異なるがその水準は概して高く、初歩的農耕の心得もあり、理解力も相當進んでをり、宗教心も發達してゐる、身長は高く堂々としてをり、皮膚は銅色であるが、容貌は整つてゐる。女には美人も少くない。大體草葺の小屋に住み、曾うてその或るものは植物の葉の衣服を着し、精巧な瓢や木地の容器などを使用してゐる。食物はタロウ芋や魚肉等であり、海には獨木舟が活躍してゐる。しかも近代に至り、歐米人等との接觸が深まるにつれ、文化水準は一段と高められ、相當進んだ農耕に従事するものや近代的産業の勞働者となつてゐるものもあり、キリスト教信者も多數に上つてゐる。

ミクロネシア人は、主としてわが委任統治區に住み、大體皮膚は暗褐色乃至淡褐色、頭髮は直毛乃至波状毛であり、身長平均は約一六二糎、ポリネシア人の一七〇糎前後なるに比し著しく矮軀である。衣服は男は裸、女は腰巻で、要するに裸體跣足であつたが、日本の委任統治下においては、男はシャツにズボン、女は簡單服となり、衣食住や文化の上に大きな變化が起つたのである。かれ等の主要食物はタロウ芋やタピオカや魚類で

あり、そして農耕は専ら婦人や子供によつて行はれ、成年男子は魚捕りをやるだけで、あとは一切女任せである。家屋は床の高い草葺小屋である。しかしかれ等は歐洲人との接觸以來椰子栽培やコブラの製造を教へられたし、殊に日本の管下に屬してからはあらゆる點に大きな變化が起り、正に近代文化と近代生活への過渡期を歩んでゐる。

第十章 米英よ何處へ行く

一、米の北方進攻路

米英海軍は太平洋の基地を悉く喪失して了つた。残るは只北方進攻路のみとなつた。この唯一の北方進攻路なるものは、日本に對して最短距離であり、且つはアメリカの地續きに進攻し得る便宜があるといへ、この方面は極めて天候不良の上、結氷のために冬季はほとんど使用不可能といふ缺點がある。しかし、今次の戦争以來、中央進攻路を失ふに至つてより、果然アメリカは北方進攻路に對する防備施設の増強に狂奔し始めた。ルーズヴェルトその他軍事當局等が、聲を大にして頻りにアラスカ方面の防備強化を唱へ、相當多額の豫算を計上したやうであるが、結局、過ぐる冬季中に於ては、あまり施

設の増強は進捗しなかつた實情にあるらしい。冬季中は準備を調へ、天候の回復を待ち、航路の開けた場合には、直ちに増強に着手するといふ手筈をとつてゐたやうである。しかるに皇軍はまたも敵の機先を制して此の方面に勇猛果敢な大作戦を展開した。しかもそれはハワイの衛星的要塞として施設の増強に努めて來たミッドウエー島と兩方面同時作戦であつて。敵に残された唯一の反撃企圖を覆滅し去つたものであつた。

アラスカ、アリユーション方面は米本國より地續きのまゝ自己の領海を連ねてもつとも安全に空軍乃至潜水艦を増派することが出来るのであつて、從來米國が對日進路中の最短距離のものとして重視し來つたものである。従つてこの方面にはアラスカのシトカ、コヂャックに海空軍の基地を設置し、なほ米陸軍航空部隊のためフェアバンクス・アンカレッジに二大航空基地を構築し、専ら重爆撃機の發着を容易にし、海陸協同作戦の基地たらしめてゐたのである。さらにアリユーション列島にはダッチハーバーならびに西端のアッツに海空軍基地設備を増強して、わが本土襲撃の機を狙つてゐたのである。殊

にハワイ敗戦後に於て急遽この方面に對する設備費豫算の大增額を可決して防備をさくゝ怠らなかつたのである。

今やアリユーションにおいてはダッチハーバーの機先攻略戦が續けられ、着々戦果を擴大しつゝあるのであるから、これが完全占領に間もあるまい。またこの占領によつてアラスカもわが銳鋒の前に懼伏して、米國は手足をもぎ取られた蟹の如く、米本土に蟄居することは時日の問題に過ぎなくなつた。

またミッドウエー方面の海戦はわが海軍にも從來に見ざる犠牲を出したのであるから、その戦闘の猛烈さは想像に絶するものがあつたと思はれるが、この一舉によつて敵の殘存空母二隻を撃沈して、海上よりの空襲「圖」を根絶せしめたことは嘆稱の他はない。

たとへ、我に空母一隻、巡洋艦一隻の大破を見たとしても虎穴に入つて虎兒を獲るためには、これ位の損傷は當然免れざるところであつて、わが作戦遂行の前途には微動だも與へるものではない、固よりこの戦闘においてわが忠勇なる將士が敵の航空部隊と堂

々空中の大決闘を交へて、わが三十機に對して敵の百二十機を撃墜したことは、天晴れ海鷲の技能を中外に發揚したるものである。

さてこのミッドウエーの強襲によつて戦前米國の誇りとしてゐた七、八隻の空母勢力は僅かにワスプか或はレンジャーの一。二隻を剩すのみとなり、太平洋上の渡洋作戦は今後暫くの間全く絶望となつたのである。

されば過般のマダカスカル、シドニーの強襲が印度洋、西南太平洋の作戦の前哨戦と見られる如く、此のアリユーション、ミッドウエー強襲もまた北東太平洋大作戦の展開を豫想し得るのである。かくて太平洋上に於る海上勢力の始ど全部を喪失したる米國は、その陸上進攻基地をも失ひ、たゞ戦々兢々として米本土の專守防禦に專念するより外はなからう。

二、敗退米英の運命

それに。飛行機の方であるが、これが日本の空軍のやうにアメリカの機も捨身になつてかゝつてくることになる、彼は航空母艦を日本の近海まで闇に紛れて近寄りして、飛行機を放ち、日本の都市を空襲することも決して困難ではないのであつて、日本人ならば必ずやれる。だが、アメリカ人のことであるから、命を賭してまでもやらないかも知れぬが、中にはやらうといふわけで、やらないとも限らないのである。何れにしても海岸線が広いので、何處からやつて来るかわからぬ。即ち「雑魚は網の目をくぐるといふことがあるから、どうしてもその網の目から潜れば潜れぬ奴がないとも限らないのである。しかしそれらのものは極く一部の局地戦であつて、全戦局の大勢を左右するといふことは到底出来ない。しかし唯それがために人心を動揺させるといふことで非常に大きな力があるのである。さういふ風に國內の人心が動揺すると、そこに思想戦の大きな温床が出来て来る。さうして日本に對しては、六萬機の飛行機を拵へて雲霞の如く日本に寄せて來るといふと、日本人の中でもそれを信用して、危ぶむやうな思想が起つて來

る。またその罅隙から他のいろ／＼な思想戦を展開して行くこともある。

されば、今後ゲリラ戦はそう屢々あるまいと思ふが、たまには行はれることを豫期しなければならぬ。さういふものに一喜一憂したり、企は一心を動搖させたりするやうなことがあつてはならない。自信たつぷりで、それ／＼の職域に奉行して行けば間違ひはないのである。アメリカの建國由來を考へると、人種の寄り集まりである。初めはピュートルタンで、アングロサクソンが中心になつて自由の天地を創造せんとしたが、あの廣大な領土を開拓するため凡ゆる方面から移民を呼び寄せざるを得なかつた。やがてその移民の方が遙に人數が多くなつて今日のアメリカを爲したのである。この中にはニグロもをり、或はスペイン人もをり、ドイツ人、イタリヤ人、日本人もあるといふ世界の人種の寄り集まりによつて構成されてゐる。その中でもニグロは千二百萬をり、これが非常な差別待遇によつて虐待されてゐる。

周知の通り私刑といふのがあつて、ニグロが少しでも白人の女をからかつたといふと火炙りの刑で私刑をやつて、彼等白人はこれを黙つて見てゐるといふ情勢である。また、アメリカでは電車もニグロの乗る所は吾々の乗る所と全く區別してある。さういふ差別待遇を受けてゐるニグロは白人に對して非常な恨みを抱いてゐる。しかもニグロの中にはプロフェッサーも出てゐる、立派な政治家も出てゐる、殊にワシントン州の如きは黒人の政治的並に文化的の町が出来てゐる。かゝる状態であるから、さういふ者がいよ／＼社會的不安に乗じて、いま／＼での鬱憤を晴らさんがために暴動を開始しないとも限らない。この外に獨伊の移民が五百萬以上ゐる。これらの者がめい／＼自國の尊嚴といふ信念を多少もつてをり、さうしてやはり祖國といふ觀念がある勿論今日においてはアメリカの市民にはなつてゐるが、やはり彼等のうちに祖國愛といふものがある。アメリカが崩れかゝつて來ると、彼等の祖國愛が蘇つて、或は樞軸側の第五列あたりになつていろ／＼のことをやらないとも限らないのである。

かゝる人種的、社會的不安がある上に漸く財政的不安が既に萌芽を現してゐる。殊に

この頃物價が非常に騰貴して、一方に軍需景氣で、インフレの兆候が段々現れてゐるといふことである。従つて今後アメリカが勝つべからざる戦争を續けて行き、非常な負擔を國民にかけることになれば、アメリカはそのまゝでは收まらな思はれる。

斯様ないろ／＼な點を考へるとこの戦争は無論樞軸側の完勝に終ることは明かであると思ふのであるが、唯いままでも日本の中にもイギリスとかアメリカに對して非常に過大評價をしてをつた人間が多い。イギリスの方はもう軒が傾いたけれども何といつても三百年の老舗である。日没しない領土をもつてゐるといつたわけで、非常にイギリスの底力を過大評價して、イギリスに對しては到底勝つべからざるものだといふ風なことを考へてをつて、しかもそれを骨の髄まで信じてゐる人間が日本にはをつたのである。同様に、アメリカに對してもさういふ風なことを考へてをる者が相當にある。さういふ人は數字によつて總てのものを判断しようとするのであつて。例へば、「アメリカは鋼鐵が八千萬トン出来る、日本は僅か何百萬トンしか出来ない、これと戦ふことは無謀であ

る」。「米の飛行機生産能力はこれだけあつて日本はこれだけである、彼の造艦能力はかういふ風であつて日本は僅かにこれだけしかない」。「金はどうかうだ」といふ、さういふことを算へ上げると戦争にも何にも成立たないことになるのである。かうした數字をもつて一國の國力を判断しやうとする、物資萬能の學者達もゐるのである。

ところが歴史は左様なものでは決して轉換してをらないのである。結局戦争に勝つものは、新に生れて來た新興の、いはゞその當時における貧弱な國が勝つのである。貧弱な國は必ず大きな要求と、また要求を貫徹しようといふ大きな迫力がある、この精神上の力をもつて、その自分のもつてゐるところの國力を最大に發揮するといふところにおいて戦争に勝つて歴史が展開して行くのである。

されば今度の戦争の結果は恐らく思ひ半ばに、過ぎるものがあらう。即ちハワイ海戦、またはクワンター沖の海戦、またマニラの襲撃、並にその後の日本陸軍の攻略戦、更に香港の攻略戦、マレーに於ける我が陸軍の快速ぶり、次でシンガポールの攻略、蘭印の戡定

等かういふものを考へると、恐らくアメリカ人もイギリス人も、その他の西洋人も、曾て考へたことのないやうな神業に近い仕事を日本の軍隊はやつて來たのである、それは何だ、といふことを考へると、物資以上に精神力が總てのものを支配するのだといふことが能くわかる、日本は 天皇に歸一して 天皇の御爲に喜んで一命を抛出す者はかりであつて死を顧みず、必死の作業を行したのであるから天の助けを得て、世界を驚歎させたやうな戦果をあげたのである、これに對してイギリスもアメリカも今日は上下色を失つて、日本のこの強力なる武力に對して、非常に恐れをなしてゐる次第である。しかも日本の經濟力或は、戦力これらに對して非常な過少の計算をしてをつたのである。過少評價をしてをつたイギリス、アメリカが今日目を醒ましたのであるが、もう既に時は遅いのである。

三、ソロモン海戦

顧みれば去る二月廿七日―三月一日のスラバヤ、バタビヤ沖海戦に於て、英米濠蘭の残存艦隊は、甲巡二(米、英)乙巡四(濠、蘭)驅逐艦八、潜水艦七、砲艦一、掃海艇一を撃沈されて、東亞に於ける彼等の海上勢力は殆んど掃蕩されたのである。次いでジャワの戡定と共に大東亞海は完全に皇軍の制壓する所となつた。彼等の敗竄部隊は若干濠洲に遁走して従來ジャワに設置された聯合軍總司令部を濠洲に移動し、バタアンの遁將マツクアーサーを其の主班に据えて、濠洲の防備は擧げて米國の手に委せられた。固より海上の艦隊を缺いた濠洲の防備は、皇軍の直接の脅威の前には眞に風前の灯に等しきものであつた。ルーズヴェルトが聲を大にして濠洲の援助を叫び、米當局が濠洲を以て對日反撃の基地たらしめるのであると傲語しても、それは米國內の無智の大衆を欺くには役立つたかも知れぬが、少しく軍事的識見を有するものにとつては一片の嘆

語に過ぎぬものとしか響かなかつた。されば濠首相カーチンの如きも危機いよく「大洋の孤兒」に切迫すと悲鳴を擧げて、米國の積極的急速援助を絶叫したものであつた。従つて皇軍の濠洲攻略は只時期の問題として世人には考へられてゐた。

併し、我國は東條首相の聲明に瞭なる如く濠洲政治家が此の時機に於て自己の立場に一大反省を加へ。徒らに恃むべからざる米英の援助に依存して、自ら其の墓穴を掘らんよりは、寧ろ速かに米英の羈絆を脱して東亞共榮圏の一環となつて自己保存を確保するの賢明なる所以を説き、しばらく軍事行動を緩めて彼等に其の反省餘裕を與たのであつた。然るに其の間に於ける濠洲の動向に深憂を抱いた米英は、あらゆる智能を搾つて無理算段の艦隊を編制し、或は空軍の増強を圖り、あらゆる手段を盡して濠洲の離反を喰止めんとしたのである。之が爲めには南方輸送路によつて若干の軍隊輸送をも行ひしものゝ如く、兎に角、濠洲をして米國依存以外には一歩も踏出し得ないやうに丸め込んでしまつたのである。

濠洲の離反は英國にとつては、それ自體大英帝國の崩壊を促すものであつて、濠洲の獨立はニュージランド、南阿聯邦の離反を誘致し、印度獨立に一層の油を注ぐものとなるのである。また米國にとつては英國の遺産相續に大番狂を生じ、折角、英國の凋落によつて思ひ懸けなき東亞の廣大な領域が、英帝國の遺産として轉げ込んで來ようとした矢先の容易ならざる出來事となるのであるから、米英共に最後の踏張りを濠洲援助にかけ、兼て濠洲の人心をして米英最後の勝利を信ぜしむると同時に、濠洲の防備權を一手に握り占めて濠洲を其の埒外に逸脱することが出來なくして了つたのである。

だが、濠洲の危機は日一日と深刻を加へて來たのであるから、その援助に何等かの具體的表現を示すにあらざれば、米本國乃至濠洲の人心を繋ぐ譯にゆかなくなつて、茲に敗殘の米英としては思ひ切つた有力艦隊を編制し、戦艦二隻、航空母艦二隻を基幹として皇軍占領地の反撃を企て、粟よくば之を奪還して連敗に氣を腐らした人心に活を入れやうとしたが、哀れ、珊瑚海の一戦に慘敗を喫して、元も子も無くして一層形勢を最後

のドタン場に追込んだのであつた。

この敗戦は米英の逆宣傳によつて一大攻勢に出で日本艦隊を撃破したかの如き印象を與へるに努めたが、この僞瞞の措置は事實の前に何時までもその真相を蔽ひ隠すことは出来なかつた。米國は己を得ず小出しに敗戦の事實を發表して濠洲及び本國の囂々たる輿論に應へたが、それが又一層濠洲を不安焦燥に驅つて何等か別の方法を講じて、この頽勢に一脈の希望を繋がしめなければ、萬事後の祭となつて取返しのかぬ運命を味はねばならぬことに氣が付いたのである。

そこで何は兎もあれ敗残の艦艇を集めて一大攻勢の擬勢を示したのが、今回のソロモン島襲撃であつた。従つてこの襲撃には種々なる意味が含まれてゐたのであつたが、又しても我が猛攻の前に全企圖は覆滅され、米英戦略の貧弱さが一層白日の下に暴露されたのである。

前記濠洲の危機は、米英にとつては歐洲戦域の勝敗にも増して痛心の種となつてゐる。獨ソ戦の開始以來、英本國は一先づ小康を得た形となつた。固より潜水艦戦の猛威には英國もつくづく閉口してゐる所であらうか、英本土の直接の脅威は暫くお預けとなつて英本國はホット息つく有様となつた、従つて米英の對獨策としてはソ聯に物心兩面の援助を強行して其の抗戦力を持續せしめ、ドイツを一大消耗戦に引摺り込むことである。假令、獨ソ戦の歸趨は豫め判斷されてゐても、ソ聯の人的物的資源は尙ほ充分獨軍を牽制し得るものと考へられてゐた。殊にそれが再度の冬季迄持ちこたへ出来れば、形勢は聯合軍に有利に展開する望みを抱かせてゐたのである。又ソ聯が一敗地に塗れて戦線が西亞に延びた所で、それか直ちに大英帝國の崩潰を促す直接の動因とはならないが、濠洲の攻略は英本土の攻略同様、直ちに大英帝國の崩潰となつて現はれるのである。又米國にとつては太平洋上の反撃基地を喪ふのみならず、更に進んで太平洋との全領土の喪

失となり、英帝國遺産相續の希望は畫餅となり、米本土は茲に皇軍の本攻を蒙ること、なるのであるから、米英にとつては獨ソ戰の勝敗よりも寧ろ濠洲の危機に重大關心を拂ふのは當然であると思なければならぬ。

しかし、今日の米英にとつてはドイツの戦力を弱むる唯一の恃みは、ソ聯の抵抗に待つの外はないのであるから、極力これか援助に努めんとしても、軍需生産の不備と船腹の不足と供給路の貧弱と不安とに妨げられて、ソ聯の要求を充たすには尙ほ甚だ遠きものがあつた。だが、老獪なる米英は飽迄ソ聯の抗戰意識を繋がん爲めに全幅の援助を惜むに非ざる旨を陳辯これ努めつゝある一方、敵の本能寺に對しては亦あらゆる手段を講じて頽勢挽回の方途を案じつゝあつたのである。これが窮餘の一策としてソロモン攻勢となつて現れたのである。

さればソロモン攻勢には左の四個の企圖が含まれてゐたものと思はれる。

一、ソ聯援助の一翼として太平洋上に第二戦線を布き樞軸牽制の意圖を表示したること。

二、本英間の連絡路を確保するため日本の前進戰略線内に有力なる味方基地を設定せんとしたこと。

三、敗戦糊塗のため我が防備の最も手薄な所を選んでこれが奪還に成功を収め一つは本國の輿論を抗戰的に導き二つには濠洲の不滿を緩和して其の離反を防がんとしたと第一については豫てよりソ聯側より米英に急速に第二戦線をドイツの背後に布かんとことを要求してゐたのであるが、これが爲め英國は數回フランス沿岸に小規模の申譯の上陸作戰を試みたが、其の都度獨軍の反撃に慘敗を喫し、最早此の方面の第二戦線は絶望視せられてゐた。

然るに今次の獨ソ戰はソ聯の最後の運命を決する危急存亡の場合であるから、第二戦線に對するソ聯の要求は愈出て、愈切なるものがあり、若しこの要求を米英が拒否するならば、獨ソの單獨講和もまた已むを得ない時機に到着するかも知れぬと嚇かされて見ると、米英もこの儘手を拱して放置する譯にもゆかず、何とか樞軸側に功勢を取つてソ

聯の機嫌を損せざるに努めなければならなくなり、百方工夫の末比較的實行力に富み且つ其の成功が直接自己の利益となる途を選んで、ソ聯に對する樞軸牽制の申譯を立てんとしたのがソロモン襲撃の一つの理由と考へられるのである。固よりこれを以てソ聯の要求する第二戦線と見做すには聊か縁が遠いやうに思はれるが、此の方面の米英の成功は、日本の勝利を堅く信じて疑はざる獨伊に若干の不安を植付けることとなり、延ひてはその士氣に及ぼす影響を考へると、必ずしも關連なきものとは云ひ得ないのである。又此の南方方面への作戦は日本の北方作戦を制肘する直接の動機となり、これがアリユーシヤンの奪還と米ソ連絡路の回復ともなれば、ソ聯援助に一段の便宜を得ることとなるのであるから、ソ聯にとつても決して無駄なる作戦とは云ひ得ないのである。且つそれにも増して米英の太平洋勢力が一大攻勢を取り得る餘力を存してゐる證左ともなつて、ソ聯の信用を取戻すに多大の効果を擧げ得るのである。

さてこれと關連として第二は今次攻勢の最重點と考へられるのである。即ち米濠間の

連絡路確保は米英に残された太平洋作戦の最後の頼みの綱である。この綱は皇軍のビスマーク群島、ソロモン群島占領によつて多大の脅威を受けつゝあるのである。殊に我が海軍が曩にアラフラ海のアル、ケイ、タニンバル三島を占領し濠洲の北方に其の戦略線を延伸して濠洲に一大威壓を加へたことは、敵にとつて最大の苦痛を與へたのである。

この次に來るものはポート・モレスビーの攻略か將又濠本土の攻略か。危機の眼前に迫る思ひを敵に與へたことは想像に難くないのである。若し米軍が此の地に有力なる空軍基地を設置し、潜水艦の補給基地を構築して、ハワイ、濠洲間の其他の基地とを連ねて防禦主戦を展開することゝなれば、今後の我が太平洋作戦にも尠からざる障碍を與ふることとなる。これが敵の最も強き狙ひ處で、又我方にとりては斷じて許し難い所である。

第三に就ては餘り多く筆を弄する必要もなく明なる所である。だが、最近米英が打ち續く敗戦に多大の打撃を蒙り、軍事上はもとより、政治上經濟上にも豫想以上の難關に

達着してゐるのである。この現状を何等かの形において打開しなければ、國民の士氣を維持することも困難な状態に措かれてゐた。殊に米國における勝敗をとり違へた逆宣傳が利き過ぎて米國大衆は今もつて米國の勝利を信じてゐるものが多い結果、何故に米國は其の勝利の波に乗つてより積極的の攻勢を取らぬのであるかとの非難さへ叫ばれてゐるのである。米政府としては其の宣傳の手前今更ら其の真相を發表する譯にもゆかず、さりとしてこの非難の聲を其の儘聞き流すことも出来ない破目に陥つたのである。これがまた英濠側にも同様に響いて米國の積極的攻勢を督促する好箇の言質となつたのだ。流石の米當局も最早や一片の聲明や強かりの放送位では、國民の疑惑を拂拭することの困難なるに想到し、頻りにその反撃の機會を狙つてゐた。その現れとして帝都の空襲を企てたが物にならず、支那を基地とする空軍の對日反撃に期待をかけたが、是亦我が先制的連爆によつて其の企圖は完全に粉碎されてしまつた。茲に於て一部有力部隊を以てアリューシャン群島に行動せしむると同時に米英の殘存艦隊を集結して甲巡、輕巡、驅逐

艦、潜水艦、航空兵力より成る有力艦隊護衛の下に輸送船十數隻に最高度の武装海兵を搭載してソロモン群島に出撃し來つたのである。其の規模の大なるは從來の比ではなかつた。米海軍省は此回の出撃を「米國が初めてとつた大攻勢である」と豪語してゐたのであるから、彼の期待は相當大なるものがあつたことは疑を容れない。

然るに英米にとつてはこの最初にして最後とも思はれる大攻勢も我が、捕捉殲滅戰の害にかゝつて、木葉微塵に粉碎され、艦船三十五隻、飛行機五十八を海底に葬り、艦船五隻を大破せしめて、對日攻勢の企圖は眼先眞暗となつてしまつたのである。之に對して我軍の損害は僅に自爆飛行機二十一、輕傷艦二隻を出したに過ぎなかつたことは、何時もながら我が海軍部隊の超人的善戰に舌を捲かしめるものがあつた。

更にこの戦果と艦船に示すと、撃沈せるもの甲巡十隻、輕巡四隻、驅逐艦九隻、潜水

艦三隻、輸送船十隻、大破せるもの甲巡一隻、驅逐艦三隻、輸送船一隻といふ近代戦に於てこれだけ多数の艦船を一舉に海底に屠つたことは殆んど其の類例を見ない。而もこの一戦に敵の艦隊は殆んど全滅し、我が海軍の眼を免れて逃走したものは幾何もなかつたのである。而かも其の艦隊が巡洋艦の精銳をすぐつたもので、之が撃沈は今後益々輸送船團の護衛に手不足を告ぐることとなり、米英にとつては甚大の打撃となるのである。

さてこの一戦によつて敵の受けた戦略上の不利は擧げて數ふ可からざるものがあるが、其の主なるものに就て見ても、濠洲ハワイ連絡路に楔を打込まんとした企圖が全く水泡に歸し、濠洲を再び赤裸々の防備態勢の儘に大洋中に放置せざるを得ざるに至つたことは、何より大なる失敗と云はざるを得ない、これによつて濠洲方面海域の制海制空權が我が海軍の手中に掌握され、その鐵壁の布陣に對しては如何なる敵をも撃滅せざれば止まざるの實證を愈々明かにしたのである。

曩に珊瑚海々戦によつて敵の航母並に戦艦を屠つて敵の心膽を凍結したのであつたが、今このソロモン海戦によつて敵をして當分再起不可能の段階に追込んだばかりでなく、如何なる邊境の占領地と雖も皇軍これを守れば、その奪還は殆んど絶望視しなければならぬことを如實に示したのである。これが米英軍の士氣に與ふる影響は物質的損耗より遙かに悲惨なるものがあらう。由來海戦の勝敗は全軍の士氣如何によつて左右されるのであつて、一度び怯氣付いた艦隊は戦ふ毎に大へマを踏むことは古來の戦術これを立証して餘りあるのである。従つて今後の我が太平洋作戦はより積極的に展開せられ、米英海軍をいよいよ窮地に追ひ込むこと、信ぜらる。

又今次の大反攻戦の企圖が、國內の輿論に媚び、英濠の人心を繋がんとして、軍事當局の功諫を押切つて決行した政略的行動によるもの、如くに想像されるのであるが、若しこれが事實とせば、ルーズヴェルト政權の戦争に對する無能力振りを暴露して、國內の輿論は愈々政府非難の聲を昂め、これがまた戦略を無視した攻略戦を繰返へすこと、

なり、戦意を喪つた海軍部隊をして益々小出しの敗戦を繰返へさすことゝならう。かくて戦争開始以來敗戦に次ぐに敗戦を重ねて、あつたら海軍を漸滅の悲運に陥し入れた戦争振りだが、一參謀總長を任命した位で、急には直るものでなく、結局政略によつて戦略を障碍し、長袖遂に兵を知らずの嘆を發するに終らざれば幸である。

之に反して我が海軍の作戦の立場は非常に有利となり單に濠洲海域に止まらず、東大平洋、印度洋に對する制壓の度は漸増し、歐洲の樞軸夏季攻勢と相俟つてスエズ攻略戦に資すること大なるべく、懸て海上連絡の完成によつて歐亞の交通を確保し、そこに磐石不敗の戦時態勢を整へ、米英軍の徹底的殲滅に邁進すべきは言ふまでもない。

又ソロモン海戦と相前後して西地中海において大規模の英輸送船團が其の護衛艦隊と共に、獨伊兩軍の猛襲に會ひ大損害の後支離滅裂に遁竄したことは、往昔の獅子、今日の窮鼠となつて、歐亞何れの海面に於ても局地の反噬さへも意の如くならざるを示すものであつて、此の兩地の大敗は嘗て七洋に君臨して海洋を我物顔に振舞つた大英海軍の

末路かと思ふと、坐ろに感慨の深きものあるを覺ゆるのである。

又曩に獨海空軍はムルマンスク方面に於て米輸送船團に襲ひかかり、これに致命的打撃を與へて北方援ソ航路に終止符を打つた。雷さへ船腹の不足に悲鳴を擧げてゐる聯合側は、東西兩方面における打續く艦船の喪失は、海を唯一の輸血路としてゐる英米にとつて何よりの痛手であつて、海の守りがいよく怪しくなつたとなれば、米英の頽勢挽回は一箇の空想となるのである。それも英米が利害を同ふし、死生を共にする覺悟の下に結束されてゐるのであればまだしも、米が英の凋落を良いことゝして自己の勢力を舊英帝國の地盤に伸張せんとし、英が自己の危急存亡の際どい瀬戸際に立つても米の不逞を疑ひ、これに全幅の信頼を寄せ得ない態度をとつてゐては、聯合作戦が旨く行く筈はないのである。それも自ら最前線に國民の血肉を投ずるならば、今日までの慘敗を喫しなかつたかも知れぬが、自己の戦争を他人事の如くに扱ひ、或は島民地兵を驅り立て、或は與國の犠牲によつて敵の戦力を弱めんとする利己的戦争振りでは最早今日の戦争體

制には適用しないのである。假令、米英がソ聯を煽て、蔣介石を使喚し、濠洲印度を口説き落して樞軸側の消耗戦を圖つても。樞軸側では戦争の進展と資源の確保とは、過去の苦き経験によつて充分その成算を付けてゐるのである。獨伊が歐洲廣域經濟圏の設定に邁進し、日本が大東亞共榮圏の建設に工夫を凝らすのも。米英の戦力増強の最後の段階に備へて、これに徹底的の打撃を加へんが爲めである。かゝる遠大の意圖の下に戦はれてゐる樞軸側の計策に對して、第一次大戰當時の如き舊式觀から抜け切らないルー・スヴェルト、チアーチルによつて指導される米英の將兵こそ、いゝ面の皮と謂はざるを得ない。小出しのゲリラ戦や小規模の上陸作戦や、茶を濁し、其の都度全滅の悲劇を繰返へして可惜壯丁を徒死せしめてゐる米英當局の戦争振りこそ、譬へやうなき罪深き業である。ソ聯は不満を唱へ、濠洲は不平を訴へ、蔣政權は怨み、印度は獨立に鋒起して、收拾すべからざる苦境に米英が立つたのも、近代戦の本質を掴み得ないデモクラ國家の末路的症狀と見做さざるを得ないのである。

ソロモン島海戦の惨敗に性懲りもなく。またしても英國軍はジエツプ附近のフランス海岸に上陸を決行したが、この作戦はソロモン島同様忽ち獨軍の探知するところとなり、陸海空の緊密な共同反撃の下に完全なる失敗に歸し、同日午後には佛海岸には一兵の敵兵の姿も消え失せたといふことである。而かもこの上陸作戦が從來の偵察上陸戦に比して相當大規模に行はれ、護衛に十數隻の艦艇を使用し英、米、カナダ、ドコール軍の混成部隊によつて行はれたが固よりこれを以て防備堅固な獨軍占領地域に第二戦線結成の足場を作ることと思ひも寄らぬところであつた。是亦ソロモン攻勢同様。ソ聯よりの第二戦線結成要求に抗し切れなかつた申譯的の政略戦に外ならなかつたと想像されるのである。果然。獨軍の殲滅作戦に遭ひ、ダンケルク同様の慘劇を演じて徒らに世間の物笑ひの種となつたのである。由來攻略戦が少しでも成功するのは、双方互格の戦が闘はれてゐる場合である、今や敗戦歴々たる英米側がコケ嚇しの攻略戦を繰返へしたところで、かすみ網に飛込む小島の如く多ければ多い程、樞軸側の獲物を増すばかりである。

米英がその大資源を擧げて兵力の増強に狂奔すればする程、樞軸側の戰意は彌が上にも奮ひ立つのである。數に物を言はせんとする英米最後の望みは、旺盛なる士氣と慎密なる計畫の前には白日の夢に過ぎない。軸樞不退轉の結束こそ完勝の鍵である。

四、歴史は轉換する

歴史は今將に古今を絶した一大轉換期に際會してゐる。樞軸興るか英米亡びるか、世界は二大陣營に分れて、各國家の總力を擧げて生死關頭の決戰に邁進してゐるのである。

惟ふに古來幾多の戰爭は、大なり小なり爾後の歴史を轉換し、新文化の創生を見るのであつたが、其の規模の狭小なる限りに於て、一二國の盛衰乃至は一地方の制覇的歴史を綴るに過ぎなかつた。斯の第一次世界戰爭に在つて日本が加はり、アメリカが加はることに依つて漸く世界戰爭の様相を呈したのであつた。斯くて此の戰爭を以て世界最終

の戰爭たらしめんとして凡有る努力が聯合國側に拂はれたのであつたが、其の結果は舊態依然として英米佛等二三強國の世界制覇體制の確保に外ならなかつた。

従つて此の體制下に措かれた他の諸國は、或は英米の頤使に甘んじ、或は新興の氣勢を殺かれ、人類發展の原則たる生成の機運は英米の利己的支配の鐵鎖の下に永へに封せられんとしたのである、従つて此の大戦より生れた世界の變局は、飽滿し切つた英佛の現状維持政策と、新興の意氣に燃え盛つた米國の世界制覇政策の一時的野合現象であつた。國際聯盟、不戰條約等、其の構想の動機には幾多新國際道義の香を漂はしてゐたのであつたが、これが成文化した時には、芳香何時しか失せて異臭紛々たる帝國主義の延長であつた。而かも此等條約の適用に當つては、更に一層帝國主義的野望の達成に資せんとした。されば斯の大戦より生れた世界體制は、何等の新味を呈することなく、一二世紀を逆轉した米國の世界政策に基礎付けられたのであつた。

然るに今次の世界大戦は、此等英米の舊體制を打破して、世界を淨化し、人類共存共

榮の恒久的平和を確立するにある。我國としては久しくアジアを毒しアジアを禍らしたる。英米勢力の根を絶ち、大東亞に人類康寧の新秩序を建設することである。獨伊またヴェルサイユ體制の鐵鎖を破斷して、歐阿を英米の桎梏より救ひ、樞軸相共に世界新秩序を清淨の天地に創成せんとすることである。

今やこの戦ひは樞軸側に有利に展開してゐる。この戦ひが長期に亘る持久戦の様相を呈したところで、樞軸側は之に對處すべき輝やかしき建設戦に巨歩を踏出してゐるのである。假令、米英が其の豊富なる物質力に物を言はして、張家の寡婦を嚇し得ても、樞軸側の新態勢は微動だもするものではない。殊に樞軸側の海上連絡が近く實現することになれば、嘗に戰略上絶対不敗の態勢を整ふるのみならず、經濟上、資源上は亦金剛不壞の殿堂が構築されるのである。

米國が聲を大にして空軍十萬臺を叫び、航空母艦八十隻商船八百萬噸の建造を唱へて、最終の勝利を信ぜしめんとしてゐるが、刻下の頽勢を挽回する唯一の手段が、この空襲

の一途に出でざる所を見れば、その戰略の貧困さが敵ながらも坐ろに哀れを催さざるを得ないのである。而かもこれ等の完成期が一二年の後とされてゐるのであるが、それ迄の期間に於ける樞軸の活動は一體停止するものと考へてゐるのであるか。歐洲に於ては獨ソ戦はドイツの完勝によつて一段落を告げ、其の餘勢は必然に西亞北阿作戦に伸び、英勢力の掃蕩と共にスエズの攻略を遂げイランの進出となり、其の銳鋒は遠く印度洋に及んで樞軸側の海上連絡は完成されるのである。又一方地中海に於ける英艦隊の敗退は、一層樞軸側の大西洋岸の守りを固めると共に更に大西洋上の攻勢に一段の猛威を振ふべきは當然である。

又東亞に於ては太平洋、印度洋の掃蕩戦は間斷なく繼續せられ、彼等の反撃基地と恃み、補給基地と頼む各地は何時まで其の餘命を保つことが出来よう。彼等の新編成艦隊が假りに新威容を太平洋岸に示し得たとしても、さて其の發航に及んで何れに其の補給基地を求めんとするか、何れに其の修理を仰かんとするか彼の西太平洋攻勢の足場は悉

く我が鐵桶の布陣に占められる限り、之を突破して我に攻勢を強行せんとせば、それこそ暴虎馮河以上の冒險である。飛んで火に入る夏の蟲たらずんば幸ひである。殊に大東亞戰開始以來、我が至妙の海軍作戰と之に従事する我が將兵の神技に對しては天下既に定論のある所である。短期の訓練を経たばかりの怯氣付つた烏合の衆を驅つて、天時、地利、人和を喪つた態勢の下に、數度の歴戦に一層の磨きをかけた我が精銳部隊に當らんとするのは、殆んど言ふべくして行はれざる所である。之を支那式に形容すれば龍車に向ふ螻螂に等しいものである。

米國の對日戰略が持久戰、經濟戰に最後の望みを繋いでゐることは周知の事實である。ハワイ海戰以來海戰に海戰を重ねた今となつては、既定の計畫は悉く粉碎されて、新たな設計の下に全企圖を立直さねばならない。それも日本が一大消耗戰の後を受けて、へト／＼の足並みを續けて居れば格別、日本の戦力、經濟力は時日の経過につれて益々増強を加へて行く現況に於て、米國の企圖は果して奏効の期を得るかごうか。米國唯一の

強みは其の富力であり、生産力であらう。だが、その持久戰にしても經濟戰にしても、その富力、生産力のみを以てしては勝利を確實ならしむるには足りない。その富力を日本に對する直接間接の攻撃手段に變形せしめることが必要である、又その攻撃武器を日本間近にまで持來たすことであらねばならぬ。

歐洲戰爭開始以來、米國の軍事産業は聯合國の兵器廠たる立場に於て促進された。殊に大東亞戰の勃發以來、米國の産業再編成は其の攻戰の補償と共に主として日本攻撃を中心にして一大飛躍を見た。例へば軍用機に一例を取つて見ても、大統領ルーズヴェルトが約二年前に年産五萬臺を企圖したが、當時これは餘りの無謀として一笑に附せられ、その後この目標は二度に亘つて切り下げられその結果は年産三萬臺にも及ばなかつたのであるが、今年年産五萬臺の域を超え、本年末は年産六萬臺、來年末は年産十二萬臺にも達するとさへ言はれてゐるのである。また商船にしても戦前二、三十萬噸の年産を示してゐた米國造船業は、現在月産六、七十隻に上り噸數にして年内四百五十萬噸生産見込

みと傳へられてゐるのである。固よりこれ等の増産には多大の眉唾を要する點も考へられるが、最近に於けるルーズヴェルトの議院教書には、産業再編成の一層の強化のため、大統領に廣大な獨裁的權力の授與を要請し、上院また既に該法案の審議を受理したのである。かゝる情勢の下に米國の生産擴張は今後一層拍車をかくべきは豫想に難からざる所である。

また米國の日本攻撃の海軍作戦が、往年戦艦を中心とする一大輪型陣による渡洋作戦であつたが、今回の連続の敗戦による戦艦の喪失と我が航空部隊の偉大なる戦績に鑑み、將來海戦に於ける航空部隊の絶大の威力を認知した米國は、昨今に至つてその作戦方法に一大變革を行ひ、多數戦艦の建造を中止し代るに一大航空戦隊の建造に主力を注ぎ、或は巡洋艦商船の航空母艦への改造を圖り之が完成の曉には空母總數は八十隻以上を數へると稱してゐるのである。今假りにこれ等航空母艦の搭載機を最少限度に見積り各艦平均五十機としても四千機の多數が空を掩ふて日本に殺倒することゝなれば、我國も相

當の被害を覺悟しなければならぬが、前述の状況下に於て果してその幾隻か日本に近寄り得るか、甚だ疑問である。而かも我國は敵に斯る雄大な構想がありとすれば、之に對處する更に一層豪壯なる準備が整へられるのである。百發百中の一門は百發一中の百門に優るとは我が海軍傳統の精神である。彼が太平、大西兩洋に強敵を邀へて其の勢力を二分する時、樞軸の精銳は敵の未だ發せざるに先だちて其の出鼻を挫き、其の發するや之を洋上に捕捉して個々分撃の悲運に叩き付けることは、從來の戦績に徴して瞭なる所である。況んや樞軸の長期戦體制は整ひ、米本土狭撃の姿勢の下に國民は戦勝の希望に輝き、銃前銃後志氣旺盛、同心一體となつて戦争目的の完遂に邁進する時、英米果して何處に行かんとするか。所詮は樞軸の完勝によつて道義的世界新秩序建設の歴史が創まるのである。

出文協承認あ270106

許不製復



昭和十七年十一月三日印
昭和十七年十一月十日發

行 刷

五、〇〇〇部

(定價 全貳圓三十錢)

著者
發行所
兼印刷人

匠 瑳 胤 次
有 村 俊 夫

印刷所

大 陸 印 刷 所

發行所 新

東 亞 協 會

(東京四二七)

東京市神田區美土代町三十番地

東京市京橋區西八丁堀三ノ二二
電話 京 橋 56 一六〇三

配給所

東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

954
135

最新刊

技術院總裁 井上匡四郎閣下序
陸軍中將 工學博士 多田禮吉述

(定價一圓)
千八百錢

將來戰と科學新兵器

國家の總戰力結果が強く要望される秋、將來の科學戰に於ける兵器の趨勢に對する獨創的な透見と科學技術に關する卓越した見解を以て高度國防國家建設の明日への動向に正しき標識を明示せられた斯界の權威多田中將の所論、戰時下一般國民の必讀の書!!

近刊

企畫院調査官 菊地春雄著

(定價一圓四十錢)

千十五錢

戰爭と建設

世界史の發展に二大要因をなす大東亞戰爭と東亞共榮圈建設とは眞の世界平和を招來せんための皇國の聖業である、本書は皇國發展に於けるこの根本原理を諸般の戰時政策の上に把握し、これを何人にも解り易く且つ興味深く説明したものである。東亞並に歐洲に於ける新秩序建設に共に邁進する皇國日本とナチスドイツの世界史的立場を對照的に闡明したのは特に本書の主要部分である、一般國民の戰時意識昂揚の名著!!



